溫井里まで

朝食を濟ます。自動車がすでに來て居る。特に部屋を明けてくれられた支配人の伊藤氏に厚く禮を云つて、例の六人で乘る。今日は、溫井里に向つて、外金剛を見ようとするのである。

塔巨里を通るが、前日に見た鶴も居ない。末輝里に來て、廣い道を急に狹い方に廻る。この方は、草の多い、通りの少ない道であるが、さすがに平坦ではある。

山を右にした平野なので、處々に楡柳の列が見える。鬱々と茂つて居る中に、鵲が鳴く。

うち煙る柳の上に重々と垂れたる空は雨降らすらし

內金剛の奇峰も、大抵雲に被はれてゐる。

「今日はどう。」

と問ふと、鮮人の運轉手は滑らかに、

「どうでせうか。」

と云つて居ると、かなり長い蛇が一疋、行手を横切らうとする。

「あれが横切つてしまうと、雨となると云つて居ます。」

と云ふや否や、車を疾駈させて、その上を通過してしまつた。恐らく、長い體は一拗り拗ぢられて、白い腹が大きく浪立つた事であらう。昨日の夕方

長安寺で、伊東氏の妹さんが、
「今日は、一間あまりもあつたのが出て隱れましたよ。」
「何處に隱れたのですか。」
「あの邊の草の中に這入つてしまひました。」
自分の部屋とあまり遠くない草叢を指す。
「よく出るんですか。」
「折々出ます。」
あまり氣味のいゝ話ではなかつた。しかし、遂にそれには逢はなかつたが、こゝで、それよりは少し小さいのを見たのである。が、これが唯一で、この以後三十餘日の旅の間に、一度も蛇といふものを見なかつた。
「火田民、火田民。」
と魚袋君が叫ぶ。

山の中途に、それらしい人家が見える。

古へのまゝにし住めば古へのまゝの歎きを人はすらむか

極近くに、あんな嶮はしい山があるとは思はれないほど平凡な畑がつゞく。やゝ幅の廣い草川がある。それに添うて、溯りつゝ車が走る。
新豐里に著くと、大道は盡きて細徑になる。新豐里といふ名はめでたいが、まことは寒村である。立場ともいふべきのが二軒、チェアーをあつかつてゐる。壁に「遠上寒山石逕斜。」と樂書してあるが、正しいのは起句ばかり

で、承句以下は全く滅茶滅茶である。

自動車は返して、女連はチェアー、男連は歩き出す。そのため長安寺から、すでに草鞋穿である。

ふと一軒の草屋に立ち寄る。夫婦のみの住家らしい。女はしきりに砧を打つてゐる。不意に内地人が現はれたので、手を止めて此方を見る。夫に、

「續けて打つて見せてくれ。」

といふが通じない。やつと分つて女は打ち出す。短い先の少し太い槌を左右の手に持つて、交互に衣板を打つ。とん〳〵と響くのが妙に寂しい。

だん〳〵爪先上りになる。上りつめる。温井嶺といふのである。甚しい石道になる。あまり高くもない。分水嶺になつてゐると見えて、今まで と異なつた川が、行手の方に流れ初める。怪奇な山容が、右手におひ〳〵見

えて來る。身はまた金剛山連峯の間に入りつゝあるのである。

下るに連れて、右手にも怪峯が見え出す。溪流は奇岩の間を爽やかに流れ下る。折々湛へては淵になる。老樹が濃きに過ぎて黒いまでの影を、その上に落とす。寒霞溪といふ名も空しくはない。溪向の怪峯の一脈を觀音連峰と云ふ。妙義の白雲、金洞、金鷄などは、その連峯中の無名山に過ぎない。むら〳〵と雨近い雲が低迷しながら、をり〳〵長い瀑をあらはす。よほど大きいであらうが、遙かな此處からは、たゞ纖々たる絲が垂れたほどにしか見えない。

石道に足を痛めつゝ進みに進むと、左側に「舊萬物相入口」といふ木標がある。忽ち勇氣が出て、すぐ分け入る。岩の間を潜つて下らうとして仰ぐと、眞に驚くべきものがある。

谷は眞白である。雨の霧が甚しく濃くなつてゐる。ふと風が吹き出す。

霧が少し掃はれる。と、前面に三四の奇岩が、突兀として聳つてゐる。いづれも幅は極めて狭いが、高さは著しく高い。拗れたやうなもの、削つたやうなもの、劍のやうなもの、鬼の顔のやうなもの、裾は霧に消されて中天に浮き出してゐる。

「えらいものがあるのですなあ。」

鋭くも立つ岩の穂尖に霧しろき朝の空は縱に
裂けたり

溪を下つて崖に添うて行く間も、上の岩には目を放たない。鐵柵を握つ

て上る間も、顏は猶上を向く。登りつめると、岩の間に出る。こゝで仰げば一層恐ろしい。よくも、こんな奇怪なものがあつたものだ。

「下を見ると目がくらむやうです。すつかりをどかされてしまつた。」

と魚袋君がいふ。岩の間から、怖々ながら一寸下をのぞく。霧が一ぱいであつて、はや何も見えない。たゞ溪流の、淙々といふ音ばかりが響く。風が一吹き來て、霧がすこし散ると、前面に一大怪峯が現出した。峯は數多の巖が集積して、自づから成つた如く、しかも各の面に多數の皺があり、尖つたところに、白いものが、雪を戴いたやうに點々としてゐる、みな苔であるらしい。そして全體は居然として一大城廓の有樣である。霧が通ると皆隱れる。すこしすると、一部だけ見える。と思ふと、全面が見える。また隱れて、今度は頂の松の群だけが見える。

「玉女峯といふのです。」

と、鮮人の案内者は云ふ。
「新萬物相まで御出になりますか。」
「この霧ではどうだらう。」
「すこしは見えるかもしれません。」
思ひ切つて、また前方の谷に下りる。下りて上ると、向うが些か見える。前の岩山と玉女峰との間に一道の流が來る。こちらの山の裏を傳つて、また一道の流が來る。これが合流して、霧をそれから立たせてゐる。その間を衝いて、こちらの溪流を傳つて上つて行く。

浸しゆく草鞋の重さ岩の間を亂れ流るゝ溪の
流に

ところ〳〵に鐵線がある。それを手繰つて進む。水が多いので、岩が滑かで屢々滑る。妻はとても續けなくなる。待たせて置いて、猶進んで行くと、自づと山に上るやうになる。こゝにも處々鐵線が下つてゐる。それを手繰るが、雨の濕で土が柔かいので、足の懸場がない。やう〳〵に石を選つては、たよりにして行く。ひどくなると、案内者が押してくれる。
「もう半分も來たのか。」
「いや、まだ三分の一も來ません。」
辛苦して進んで、暫くしてまた聞く。
「まだ半分になりません。」
すつかり失望してしまう。内地ならば、三分の一でなくても、勇氣を附け

るために「半分だ。」位に云つてしまう。その思ひやりをせずに、正直に云ふところは嘘でなくて、衰君の有妻無妻の問答とおなじく、甚だ結構ではあるが、所によつては、少し恨めしくも思はれる。

猿だになづまむ峠をあへぎ上り遂に入りけり
霧の眞中に

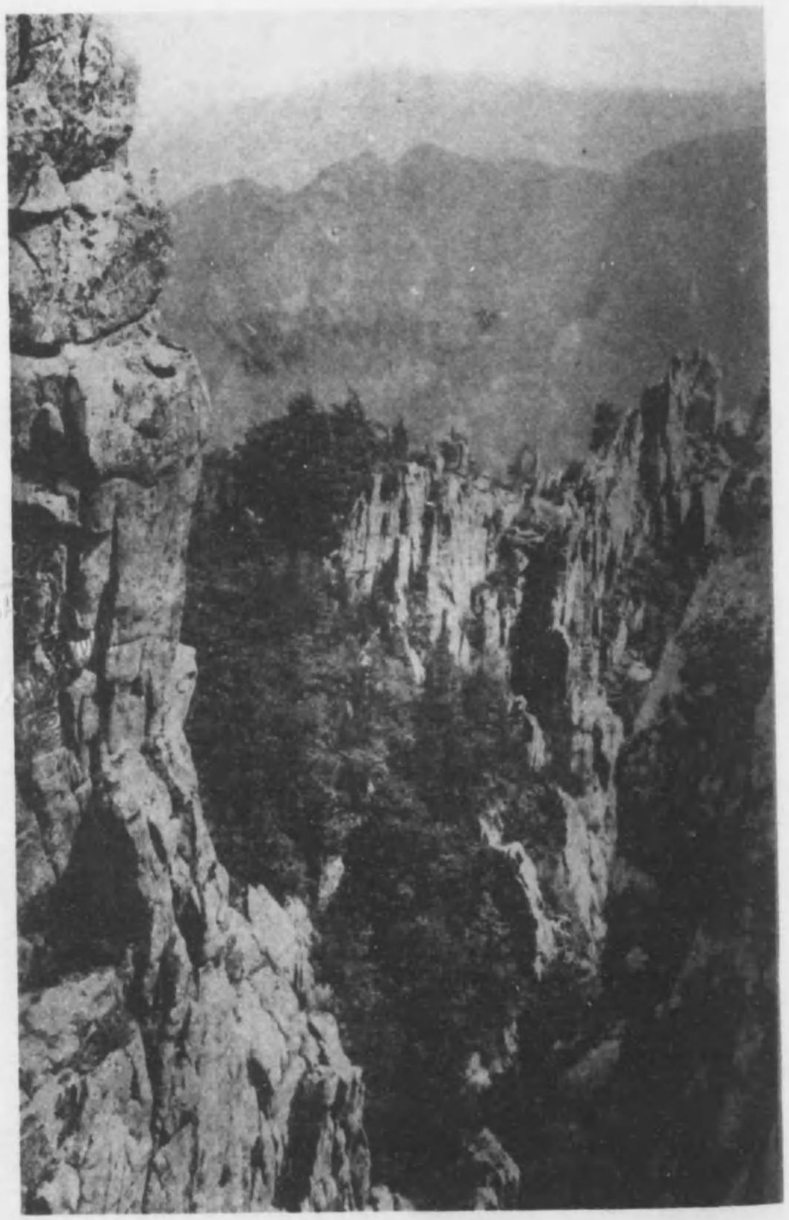
しかし、とう〳〵少し平坦なところに出た。突角である。
「こゝから見れば、大體分かります。」
と云ふので、待つてゐる。

盛んに去來した霧が、重くなつて靜まつてしまつた。中々動きさうもない。今は待つものは、風のみである。

樹木は蓊鬱として居る。岩山の半面は森林である。見馴れない木も密生してゐる。その間に點在して楓があつて、皆自然に面白く屈折してゐる。これが紅葉したら、どんなであらうとまづ思ふ。それらの木から、雫が盛んに落ちる。霧は誠の雨となるらしい。風、風、風、待たれるのは風だ。

待つこと三十分ばかり、微風が起つた。霧が少し動いた。前の大きな谷を隔てた前方に、劍戟のやうなものが、森然として一列に立つた一瞬間、濃い霧が押し寄せた。幻はすぐ消えて、もとの灰白い幕に返つた。

もう一度見たいものだ。また風が起ればと待つて居ると、たゞ霧の雫だけが聞こえて、風は少しも感じられない。しかたがないので、再び嶮峻な崖下りをする。



金剛山万物相

木にすがり草をとりつゝ猶思ふほの見し事は
夢かあらぬか

下から犬が上つて來て、人懐かしさうに尾を振る。珍らしい事だと思ふと、西洋人が二人上つて來る。鮮語を使つて案内者に聞く。

「駄目だ。」

と云つたらしいが、構はず上つて行く。少し下ると、また二人來る。今度のは内地人だ。

「どうですか。」

「とても駄目です。」
「歸らうか。」
「行かうか。」
と二人が相談する。
「切角だから。」
と云つて、上るに極めて磨れ違つて上る。この人に後に逢つた。
「極一寸見えて、遂に駄目でした。」
と云ふ。此の日は、誰も自分と同じであつたらしい。
川の中をぽちや〳〵と通つて、舊萬物相まで歸つて來た。こゝの岩は、三仙巖、鬼面巖といふのださうである。腰を岩角に下して、再びこゝに眺望の目を放つ。
霧が少し霽れて、魚袋君を驚かした谿間が見える。さほどの深さではな

いが、藥研形に深い凹みである。兩溪流の合したのが、亂石の間を奔馳してゐる。前面の玉女峰の連續の奇峰が亂立して、末は黑い影を、殘つた霧の上に投げてゐる。時々風が通る。

荒らかに峽吹き出づる風に乘りて山の雨霧音
立て走る

本の道を歸つて、本道に出てやゝ下ると、廢屋が一軒見える。その屋上に立つて、一人の鮮人が竿を振つて居る。何の事とも分らない。しばらくして止めて下りた。その家を離れると、自分と魚袋君との外は、豐福君と夫人

と永井君と妻と皆集まつて、奇巖を後に、燒火を前に、弁當を開いて居る。自分らが、新萬物相見物中に集まつたのであつた。盛夏中でも、今日は霧で一層冷やかなので、日中猶燒火を要するのである。

此處の家は、名は萬相亭。萬物相行の旅客の休み場所である。こゝの主人は金剛山を描寫すべく、半永住をした畫家であつた。それが何か事があつて、夫妻相殺傷して、主人は死に、細君のみが蟲の息であつた。往來がないので長く知られなかつたが、遂に知られて捕へられた。その跡は荒廢に任せたので、今のやうになつたのだといふ。

「この前に來た時には、御茶を入れて、よく待遇してくれたのになあ。」

と誰かが云つた。

家に這入つて見ると、室は一物もとゞめない。四壁は血で染められたのださうだが、大抵證據品としてむしり取られて、あとに殘つた紙が些か白く、

凄蒼の氣を漲らして、居るに堪へない。

「この上に居たのは、何をしてゐたのか。」

「あれは、栗鼠を捕らうとしてゐたのです。」

「どうして竿で取るのか。」

「竿の尖に絲があつて、それがわなになつてゐるので、栗鼠を引つかけるのです。」

と案内者は云ふ。野馬を捕るのに、繩を用ゐるのは知つてゐるが、栗鼠に同樣の事をするのを、初めて見た。

今度は、自分もチェアーに乘る。石道を、人夫が盛んに飛ばして行く。中中愉快であるが、寒霞溪の好風景を、ともすれば看過してしまう。

溪流は幾曲りして居るが、或は荒く岩を下り、或は柔かく崕を繞る。枯木槎枒の下を潛るのは、宛然たる南畫式である。稚松叢生の間を迂るのは、す

つかり倭畫風である。

肩を代へるために、人夫は時々立ち止まる。その間に出て、岸に立つて觀音連峰を見る。突兀として居る峰と峰との間に、をり〳〵また瀧が見える。霧が驀然として遣つて來る。山の半面以上は被はれて、高峯のみが殘る、かと思ふと、悠然として去る。と數峰また數峰、忽然と現はれて來る。霧の來往が早いほど、景趣の變化が甚しい。

石道がだん〳〵坦らかになる。兩方に畑があり出す。突如として紺碧が見える。日本海である。慶州以來遠ざかつた日本海である。岩山が遠くなつて、草山が近くなる。兩方が畑、草山となると、里が現はれる。溫井里である。

恐ろしき岩仰ぎ來し目に親し三日見さりし草
の青山

地は全く平坦である。黍畑の間を一氣に突き拔ける。二階建の優雅な洋式建築の前にチェアーがとまる。下りると、まさに溫井里ホテルである。日は沈むには少し早い。豐福君等は、日本旅館に行かうとする。

「では、また明日。今度は、外金剛の神髓を見ませう。」

「御機嫌よう。」

薄くなる影を曳きながら、別れた人々は行く。

外金剛

早くから、前庭で人聲がする。隨分多人數らしい。夜は明け離れて、窓から青い空が見える。起き出して見ると、昨日の草山が目に入る。その上に、些かの霧が遺つて居る。柔かい平野の景色であるが、その反對の側には、巖骨稜々たる奇峰が聳えて居る。これには霧もかゝらず、どす黑い山肌が身に迫まつて來る。

前庭を見下すと、チェアーを用意して來た鮮人人夫が、草の上に團欒して口々に語りあつてゐる。床にゐて聞いたのは、この聲であつた。約束は八時である。こんなに早く來ても用はない。家に居て、ゆつくりと朝食でもして出かけたらよさそうなものだと思ふ。

宿泊者が多くないのは、避暑客の來ないためである。長安寺は極めて凉

しい。その上に、風致が獨逸の山中に似て居るからと云つて、上海、香港あたりからまでも、獨逸人がやつて來る。ホテルに空室が失くなつて、收容が出來ない。止むなくテントを庭前に張つて、それに這入つてもらふ。長身肥軀の人が、畳の中は、山中や、ホテルの廣間、川中のプール、夜の娯樂室と遊び廻つて居るが、夜が更けると、狹いテントにもぐり込む。全然、蟹が穴に這入る樣子である。

それに比して、溫井里は涼しくない。名の通り溫泉が溢れてゐて、柔かい感じはあるが、涼しくない一事が、避暑客を遠ざからしめた。それとともに、自分らの起臥は、極めて悠然たるものがある。

浴室は極めて綺麗に出來てゐる。底に丸石を敷き詰めた浴槽に湛へた溫泉は、玉の如く美しい。朝の氣はさすがに冷めたい。自分のものゝやうに、何時までも浸つてゐる。

こゝろよく冷えたる肌にしみとほるいで湯の
熱は嬉しきろかも

食堂に這入つて、珍らしく日本食をとる。

「早くから、大勢來ることですな。」

「何、あゝやつて集まつて、煙草を呑みながら、いつまでも話すのが樂みなのですよ。」

さては娯樂のためであつたのかと驚く。しかし、時間が來ても來ない連中に比べては、たしかに感心である。

豐福君の連中が來る。

「宿はどうでしたか。」

「溫泉が、自然の岩の間から湧き出してゐるのですからな。」

などといふ。豐福君、今日は、夫人と二人チェアーで出かけて來た。が、數が足らなかつたと見えて、木を曲げて作りつけた粗末なので、氣の毒な感じがする。自分と、妻と、魚袋君と、またチェアーに乘る。永井君一人は健脚を誇つて徒歩である。

畑の間をチェアーの一列が行く。人夫の脚は割合に早い。早いとともに、しやくるやうになつて、乘手の身體は前後に動く。頭が、がつくりがつくりする。

「チェアーも樂ではないですな。」

と豐福君がいふ。

峠道にかゝる。極樂峴といふさうである。秋草が雜木に交つて咲いてゐる。女郎花がことに目に著く。木萩も多い。

越すと、疎林の間を道はうねつて下る。向うに寺が見え出す。神溪寺である。飛棟彩椽が後の山の綠に映じたさまは、こゝも繪そのまゝである。道が平らになる。松の大木がある。枝を蓋のやうに張つて飛舞する樣であるが、惜しい事には、葉が落ち盡くして、何年前からか、筋張つた枯木になつてしまつてゐる。

「こゝから集仙峯が見えるのですが、曇つてゐて惜しい事です。」

と人夫が云ふ。惜しいものは松のみではない。實に前面一帶は大霧で、近い峯の所在さへ明らかでない。

再びは來むともなしに今日もまた霧のま中を
行かむとするか

神溪寺の般若寶殿の前に立つ。昔は大寺であつて、伽藍具備してゐたさうであるが、幾回かの火災で、かく小規模になつたのだといふ。これもまた惜しい一つである。例の、近くてはあまりに強い色彩を持つ建築を見た目を前に轉ずると、優秀な形をもつ一古塔に出逢ふ。これは千餘年前のものだといふ。あまり高くはないが、古い形、さびた具合、この寺中でこれが一番の觀物である。

神溪寺を出たチェアーの列は、傾斜を上り下り、廻り廻りしつゝ進む。清い溪流の右側を行くのである。水はこゝでも怒號はしない。稜の少ない

岩の間をうねりつゝ繞りつゝ、緩かな快い音を立てゝ流れるのである。

霧がおひ〳〵薄らぐ。溪の向うの連峰はいづれも高い。特に怪奇な形はないが、猶大巖の并列である。霧がをり〳〵かゝつては晴れて行く。細い瀧が、頂近いところから幾條も落ちてゐる。

「この前には、あんなに瀧はなかつたのですが。」

「昨日の霧が、この邊では雨だつたのでせう。」

「岩の大屏風ですなあ。」

「ところ〴〵に、松だの瀧だのと、いゝ配合ですな。」

チェアーの止まつたところで、口々にいろ〳〵な評をする。

チェアーがまた動き出す。幾曲りして行く中に、遂に路が溪川と并行する。と渡場になる。チェアーは止まつて、乘手は皆下りて渡る。岩と岩との距離が廣く且つ高いので、自づから飛ばねばならぬやうになる。人夫は

前に立つて、手を引いて助けてくれる。

川の左になると、道はだん〳〵嶮はしく、岩ばかりとなる。それをチェアーは高くなり、低くなりつゝ進む。人夫は頗る上手である。成るべく、平衡を得るやうに務めつゝ行く。外から見れば、平地よりも危く感ぜられるであらうが、乘手は却つて樂である。路傍に、楓の樹の屈曲して姿態を作つてゐるのが多い。

右に左に渡りかへして、屢〻チェアーから下される。渡りつゝ前面を見る。霧が疊まつたやうに重なつてゐる。松の梢がすこし見える。

ぽつかりとさ霧の上に一つ浮き根もなき峰の
岩大なり

道は金剛門といふ岩の下を潜るやうになる。チェアーはもとより行かない。下りて通り脱ける。苔が滑かで、辷らうとするのを履み締める。奇髻怪峰は著しく迫つて來て、四方から壓迫する。溪流の響は頗る高くなつて、四壁に反響する。が、甚しく騷々しくはない。

溪流――玉流洞の名で呼ばれてゐる――は遂に大迂曲をする。殊に大きな面積の巖があつて、その曲り角に廣がつて居る。それに上らうとすると、人夫は、

「そこに行つては危ない。西洋人が一人死んだのですから。」

といふ。成程一寸辷れば、溪流の渦の中に落ちてしまうであらう。が、その下から烟が盛んに上つてゐる。外の組の人夫が、他の路から下りて客の

歸りを待つ間、火を燒いてゐるのである。

谷底の燒火の烟見るがうちに霧につゞきて山
曇らすも

チェアーは全然行かなくなる。下りて崖に添うて進む。傾斜はかなり急である。足かがりとなるべき何物もない。丸木を横たへて、動かないやうにしてある。それに足をかけて辿る。中心を失ふと溪流に落ちる危險がある。溪流は潭をなし、瀨をなし、紺碧と雪白と交錯して、上へ上へと連なる。鳥の聲もしない。仰げば、兩方の絶壁に迫められた空を、殘つた霧が徂

徠して居る。

霽れ上る霧をうれしみ仰ぎ見る狹きみ空の青
は深しも

鐵鎖が張り渡されてある。人はこれを力に進むべきであるが、その支柱は飴の如く彎曲して、急瀨の方に向つてゐる。

「變に曲つてゐますね。」

「峯から雪崩が落ちるからです。」

「よほど強いと見えますね。すつかり、飴のやうではありませんか。」

「これでは、手摺にも何にもなりませんね。」

中心を失はないやうに心がけつゝ崖路を傳ふと、こゝからは案内者となつた鮮人の人夫は、極めてよく注意して、手を取つて呉れる。

大巖が行手を遮る。溪流はその下の罅隙を潜つて流れ下つて、藍靛の靜かな潭(たん)を作る。また躍り越えて、碧淵を漲らしつゝ潭をなす。連珠潭、眞珠潭、潭の名が美しいとともに、湛へた水も美しい。

傾きて淵の濃藍になだれ入る白く平たき岸の
岩ども

特に峻秀な一峯が行手に見える。

「あれが舞鳳峯です。」

「名もいゝが、形もいゝですな。」

目も及ばぬほどの崖から、流れ下る一條の飛瀑に出逢ふ。

上方には霧が猶迷ひつゝある。鬱々たる水は、それから瀉下してゐるのである。

幾度か流れためらひわが前に音せぬ山の水落
ち來る

赭色を帶びて、殆んど一樹一木の影もとゞめない大絶壁は、幾筋かの横皺を保ちつゝ、崖の上を怖々と渡りゆく自分らの脚底まで、急傾斜を以て連なつてゐる。瀉下する水は、處々に滯りつゝ、然し止まり得ずして擴がりつゝ、薄い布を曳下ろすやうに落ち來るのである。そして、緩やかな勢を以て、自分の涉る亂石の間を流れ、更により急な絶壁に逢つて、また一條の瀑布を作つて下方の碧潭に落ちるのである。やさしい瀧、美しい瀧、かやうなものは內外金剛、こゝではじめて出逢ひ得るのである。山風がをり〳〵起る。高いところは霧と交はる。低いところは簾と靡く。

横に吹く山の嵐に散りもせで傾き落つる瀧は
長しも

「これが飛鳳瀑です。」

と案內者は云ふ。「ばく」といはず「たき」といふ。內地人がすべて「たき」といふので、鮮人はそれに倣つて、固有名詞までも改めたのである。

嶮はしい路を、溪の右に左に渡つて、淵潭橋といふのを過ぎると、前方に、すでに大絶壁が見え、大瀑布が見える。心が急ぐ。嶮絶をものともせずに、一氣に進む。

木梯を架した上に粗末な亭がある。急いでそれに上つて、欄に凭つて目を前方に放つ。

何といふ珍らしさであらう。美しさであらう。大絶壁は、たゞ一枚の碧を帶びた巖である。それを傳はつて落ちに落ちる一條の白練、百七十餘尺

あるといふ。たゞ些かのみの曲りをもつて、同じ色の岩から成る崖底に落ちる。そこに穿たれた瀧壺は、三十餘尺あるといふ。が、亭からはたゞ一坪位にしか見えない。

亭から瀧までは、廣い深い谷一つ隔てゝゐる。それに拘らず音は強く響く。瀧の側に刻した「彌勒佛」の三字も、極めて鮮やかに目に映ずる。それのみならず、その筆者の名、刻者の名までも明らかに讀まれる。

「あの字の一畫に、一人が這入つて、ゆつくり寢られるといふのです。」

「大變廣くつて深いのですな。」

「こゝからは、一二寸の幅にしか見えませんね。」

瀧の附近の岩は霧に濕つてゐる。下りるのに躊躇せられる。が、例の勇者の永井君は、靴のまゝで下りてゆく。遠く遠くなり行く姿が、遂に瀧壺のところまで達する。立ち止まつて、杖を上げて此方を招く。

巨身の人もあの位である。これに比べると、瀧壺は大きなものだ。五十三佛に追はれた九龍は、何處に潜んだか分らないが、恐らくは此處であらう。九龍淵といふ名は、これを實にするが如く呼ばれてゐる。それにしても、猶一層瀧は大きなものだ。

亭の欄干に近く、辨當の箸を上げつゝ瀧を見る。サイダーのコップを手にしつゝ瀧を見る。林檎を喫しつゝ瀧を見る。茶を飲みつゝ瀧を見る。すべてを終つて、更に瀧を見る。

つく〳〵と見の長ければ山の瀧時々つよく水落ち來る

直立てる壁の半處にひゞあらし瀧はすこしく
身をくねらせり

とゞろきて瀧は落つれど底深み湧きはあがら
ぬ青淵の水

かゝりては晴るゝさ霧に瀧口のうしろの山は
見えみ見えずみ

うち仰ぎうち見おろせば我身また瀧とともに
も落つるこゝちす

「もう歸るとしませう。海金剛もあるのですから。」
促がされて、亭の木梯を下る。潭淵橋に來る。猶目は瀧を離れない。

昔もなくわが眼の前に落ち續き瀧は消ゆべき
日のあらざらむ

海金剛

内外金剛の怪奇は陸で盡きず、餘脈が海に入つて、更に海金剛と呼ばれる秀拔な岩礁の一群を作つて居る。

溫井里から見える日本海の紺碧は、近いやうでまだ遠い。狹い峽谷で蹙められた眼は、はやく廣い眺で暢びようと求める。

「そりやあ綺麗ですよ。岩の間に、海草がゆらゆらと生えて、大きな魚がついついと歩くのが、殘らず見えるのですからなあ。」

と永井君が手眞似までしていふ。その人を案内者として、ホテルから自動車を走らせる。

外金剛の跋渉が案外早く濟んだので、まだ日が高い。夕方までには、十分に見て歸れるといふので、車中いづれも悠々として居る。

元山街道から右に曲つて、平野の間を車は飛ぶ。左手に金剛一帶が見えるが、どれが何の峯だか分らない。彩霞峯といふのだと說明される。が、初めて見る特別な巍然たる形をしてゐる。

朝鮮特有の赤禿山が處々に見える。その下から平蕪が連なつて居る。道はその間を始んど眞直に通ずる。一列の松林が見える。その邊を赤壁江が流れてゐるのだといふ。

三里ばかりを疾驅すると、いよ〳〵日本海の碧波が目に滿ちて來る。陸が窮まるところで、車を棄てる。高城といふ村である。

一帶の砂濱。どこに海金剛などといふ奇岩の群があるのかと訝からしめるほど、平坦な沙濱が、さゝやかな入江を抱いてゐる。

茶店に入つて、舟の用意の出來るのを待つ。沖の方には大うねりがあつて、白い波頭が、大魚の腹を返すやうに立ち頻つてゐる。風があるらしい。

舟に弱い自分には、禁物の日だと一寸困る。

舟の用意が出來たので、みんな乘る。自分も勢よく乘る。ゆらゆらと出るが、入江の中だから、驚くことはない。

左手に、奇礁の屏風が見え出す。海金剛はこれかと見るが、内外の奇趣に馴れた目には「なんだ、こんなものは。」と云ふ氣がする。

舟は沖へ沖へと向ふ。水の色が藍碧になる。波が白く折れかへる。舟の動搖が強くなる。行手の大うねりが、此處まで烈しく影響する。

「ゆら〳〵も、つい〳〵も見えないではありませんか。」

と誰かが、永井君を責める。

「今日は、どうしたのですかなあ。」

と永井君も見當のちがつた顏をする。

舟路は一轉する。岩の屏風の向側に進まうとするのである。波がすこ

しく靜かになる。

一廻り廻ると、舟は岩壁に近づく。見ると、筍の如うな直立した大岩の集まりである。色が代赭を帶びたので、明る過ぎて、昨日のやうな凄味を感じさせないが、多くの陰影を保ちつゝ并列したところは、確かに一奇觀である。

岩壁に沿うて進んだ舟が、壁と壁との罅間から這入ると、こゝは四周皆新たな岩壁である。

「これが金剛門といふのです。」

「方々に金剛門があるのですな。」

「その中で、こゝのが一番門らしいですね。」

屹立幾十尺であらう。あまり高くはないが、垂直であるので、上までは、仰ぐ目遙かな心持がする。代赭色は強いが、こゝでは、雄偉の姿に壓せられて、すでに目に著かない。その下に并ぶ岩も猶凡ではない。

隈多き巖間〳〵にさし入りて白く騒立つ午後の夏潮

舟が岩の蔭になると、代赭は薄紫にかはる。波の白も暗さを帶びる。また舟が廻る。紫は明るさを加へる。波は喜ぶやうに岩に戯れる。かかつては落ちる音が、笑ひさゞめくやうである。

ふと呼ぶ聲がする。見ると、前方に、舟から岩の上に上つてゐる一群がある。

「これは御珍らしい。先日は。」

と答へる。京城で、自分らを歡迎せられた醫學博士夫人の一行である。

岩に上らうとすると、

「そのまゝで入らつしやい。寫しますから。」

と寫眞機を向けられる。

舟の上で一齊にふり向く。すぐ濟む。

「また溫井里で御目にかゝりませう。」

と一行は舟に乘る。それが見る見る遠くなる。

舟から上つて、平たい岩の面で休む。岩の水に及ぶところに、貝類が多く附いてゐる。それを凝視すると、おひ〳〵底の海藻が見え出す。波が靜まつて、午後の日は殆んど底までさし透す。昆布か若布か、根までも見える。と波が來る。光が細かく碎けて、藻は一齊に搖れる。白い腹を見せて、何の魚か、その間を横になりつゝ通り拔ける。また來る。また拔ける。

「ゆら〳〵、つい〳〵がありますな。」

と注意する。永井君の顏色がうれしさうに變る。

岩壁の間の入海は廣くはないが、景趣に變化がある。一昨日昨日と異なつて、優麗と瀟灑とを帶びてゐる。

岸壁の間を離れた舟は、更に沖の方へ出る。波がまた荒くなる。沖の白さは强くなつて、無數の白鳥が飛ぶやうである。舟の動搖が烈しい。

一つの島を舟は廻る。島は花崗岩の磊塊たる累積であつて、木も草もない。人を脅すやうに、碧浪の中に峙つて、怪奇な顏を向けて居る。

「恐ろしい岩ですな。」

と云ひつゝ見上げると、ふと巖頭に立つたものがある。鶴である。二羽である。雄と雌とが、岩が高いので、鷄の脚の殊に長い位にしか見えない。

一羽は飛ばうとするらしい。翼を擴げた。一羽は留まつてゐたいらしい。應じようとしない。躊躇しつゝ、一羽は遂に飛ぶ。翩然として翼をかへして、巖の上の空を一廻りする。誘はうとするらしい。が、まだ應ぜぬ。思ひ切つて高く上る。さつと下つて、羽を緩やかに動かしながら、然しながら速度は早く、はてもない波の上を飛んで行く。一羽は嘴を揚げた。高鳴きするらしい。呼び返へさうとするのか。波の音が高いので、何も聞えない。飛ぶものは遠く遠く行く。

蒼波に翼を染めていづこまで行くらむ鶴か大
海の上を

船暈が遂に初まつた。舟底に寢て包を枕にする。仰ぐと、天は青く晴れて、たゞ白雲が點々としてゐる。それが左右に絶間なく動く。舟が動くだけ動くのである。

巖角が目を掠める。また一つ島が來た。頭を向けて見る。今度のには松がある。倒生したのがおもしろい。「まつしま」と鮮人の船頭がいふ。この名も內地化してゐる。

「この島に、鶴が居ればいゝのに。」

「今向うを飛んだのが、來て居るかも知れません。」

廻り廻り見るが、遂に見えない。松の間に隱れたのでもあるまい。遠く餌をあさりに行つたのであらう。止まつたのは、こゝに子を置いて居るためか、否か。

島山の松まだ若しあしたづの巢を占めむには
まばらならむか

動搖が少なくなる。舟が濱に近づきつゝあるのである。しかし、まだ起き上らずに雲を見てゐる。

叢石亭

朝の空は、今日もよく晴れてゐる。

溫井里ホテルの伊藤支配人に、懇に送られて出た自分らの自動車は、平坦な道を心地よく走る、乾いた川を渡る。荒れた野を横ぎる。まばらに家がある、聯のめでたいのを張つたのが、ことに目につく。

海に添うて路は走る。その海は甚しく紺碧である。

長箭といふ港が見えて來る。こゝから、汽船が元山に通つてゐる。その待合のところも見える。その町を、すぐに馳せ通る。

二時間ばかり走りつゞける。庫底といふ村が見える。家つゞきのところで車がとまる。

「舟にしませうか。」

「何がですか。」

「叢石亭を、舟から見ようといふのです。」

「波が高いでせう。」

「風がないから、いゝかも知れません。」

家の主婦も、舟をすゝめて居るやうである。昨日の舟にすこし懲りた自分は、あまり賛成はしないが、形勢を見て居ると、豐福君が「陸の方がいゝ。」と云つたらしく、舟は止めとなる。自分もその方が至極結構だ。

車を下りて歩きはじめる。至つて平凡な村道である。暫くすると、草原に出る。草は氣持がいゝほど柔かで青い。それを履んで行くと、半島の一部にかゝる。

墓原がある。その邊から、歩の速いのと、遲いのとで、自然にばら〳〵になる。先に行く人を見ると、草原をだら〳〵上りに上りつゝ、疎林の中に這入

る。林は皆松である。

海の風がさつ／＼と吹く。草が靡く。松の音が起る。人は小さくなつて、此方の進むとともに見えて來た岩の上にかゝつてゐる。

道は迂曲して居るので早くは行けない。追ひ著かうと思つて、捷徑をとつて、やゝ駈けながら疎林の中に入る。

海は廣く見える。波はかなり高い。汽船が一つ通つてゐる。元山から長箭を指すのである。乘らなくてよかつた。あんな具合ならば、すぐ酔つてしまうであらう。乘つてゐる人々に同情する。

半島が全部見える。此方は、すべて松を所々にもつた青草に蒙はれてゐる。さきになると、だん／＼細くなる。青草はいつしか盡きて、岩ばかりになる。そして蜿蜒として、樓を一つ載せた岩に到つて、少しく太り、且つ極まつてゐる。

道が細くなるに從つて、岩がのこりなく見える。その岩は皆玄武岩である。海から、大きな柱となつて蠱立してゐる。それが數へ切れぬほど、隙間なく立ち并んで、一大障壁をつくつてゐる。波はその下に盛んにうち寄せて、喧嗒の音を強く立てゝゐる。

「珍らしい岩もあるものですな。」

「これを舟から見上げると、恐ろしいほどの高さに見えるのです。」

と永井君が云ふ。目のまはるやうな氣持をしながら、思ひ切つて下を見おろす。

日に背きをぐらき岩のはざまより明るき方に
波湧きめぐる

波石亭

岩には、横に倒れてゐるのもある。また短くて、波に洗はれるほどのも見える。

「あの低いのは、ほんとうに大きな龜が這つてゐるとしか見えませんね。」

「龜を玄武といふ意味が、すぐ分りますな。」

岩の屏風は、屈曲してゐる。その頂點を今歩いてゐるのである。

なめらけき底の靴もていさゝかの草ふむ岩の
道の危ふさ

右の入江の方は殆んど波がない、こちらにも、岩の屏風は開かれてゐる。

龜の背はすつかり見える。

「どのくらゐ高さがあるのでせうか。」

「七十尺あまりもあるといふのです。」

「こゝに四つ高いところがあるでせう。これを四仙峯といつてゐるさうです。」

「海から見たら、峯と見えるのでせう。」

「峯といふよりも、全體が城で、それが櫓のやうに見えるといふことです。」

遂に半島の突角に來た。先きに來た人たちは、樓の下で休んでゐる。こゝにはまた茂つてゐる。

こが叢石亭である。青草がこゝにはまた茂つてゐる。

「上に上つたらどうでせう。」

「上られるでせうか。」
すこしむづかしいが、みんな上る。眺望は一層いゝ。日本海がことに廣く見える。例の汽船がまだ搖られてゐる。

酔ひ臥せる人の頭を上げしめて見するもあら
むこの岩群を

島が一つ見える。無人島であらう。南のそれよりも黒みが添うてゐて、何だか恐ろしい海である。ふりかへると、通つて來た半島の頂がよく見える。その此方に向いたところには、大きな玄武岩の特立した大きな柱が幾

群も見える。
「一寸見ると單純ですが、よく見れば中々複雜してゐますね。」
「もとはまだ〳〵澤山あつたのでせう。それが倒れたり、崩れたりしたのでせう。」
倒れたのや、崩れたのは、却つて入江に向つた方に多い。
樓の上で食事を初める。昨日までは、高い岩の間でしたが、今日は廣い海の上でする。

こゝまでは來も及ばねば崖下の狂ひ波見る心
ゆたかに

沖の汽船は、だん〳〵此方に近づいて來る。

「舟から、こゝがよく見えるでせう。」

「何だか人らしいものがゐるといふので、望遠鏡なんか出してゐるでせう。」

いかめしき岩城の上に立つ我を斥候(ものみ)のごとく
人見るらむか

風は殆んど止んだ。しかし日は熱くもないので、悠々として見まはす。樓の修繕に關した寄附者の額がかゝつてゐる。「金」と「朴」といふのが非常に

ある。

「こんなに同姓が多くつては、こまらんでせうか。名だつて、必ず異ふといふこともありますまいから。」

「さうでもないさうです。何處の朴氏、何處の金氏とすぐ分るんださうです。」

樓を下りて寫眞を撮る。思へば、この人々と今日まで五日を共にしたのであるが、恐らく、これが永久の記念となるであらう。

隔つべき海前にありいつまでか共にあられむ
人とわれぞも

沖の汽船は猶揺られてゐる。しかし、こゝからの距離は遠くなつた。乘つた人々は、長箭の近づくのを喜んでゐるであらう。

碧蹄館

「小西が破れたさうだ。」

「大友も逃げたさうだ。」

「ひどい敗け方だといふではないか。」

「雲のやうな敵にだまし打に逢つたといふのだ。」

「不用意な事ではないか。」

「大友は聞き逃げたさうだ。何といふ腰拔だ。」

早打がよくない報告を齎して續々京城に來る。不安な日が喧噪の中に過ぎる。遂に、青ざめた顏、ちぎれた物具をした人々が、極度の疲勞に堪へつつ引擧げて來る。

評定が何回となく開かれる。

「どういふ事になるだらうか。」
「籠城といふ說が盛んださうだ。」
「開城に居る小早川や、立花は、歸らんではないか。それを見殺しにするのか。」
「それを說得に、大谷が出かけたさうだ。」
「多人數でこゝに籠つたら、兵糧をどうするのだらうか。」
「それにこまるといふ議論も出たといふ。速戰でやつつけなければ、駄目だといふ人もあるさうだ。」
「向も見えないやうな多勢に向つて、速戰が出來るだらうか。」
こゝで敗けてはもう仕方がない。成るべく自重して、本國の應援を待つ。
そして、圍城に倦んだやつをうち返す外はないといふのが、奉行の腹らしいといふ。

「そんな生ぬるい事では、どうなるものか。」
「しかし、もし敗けたら、釜山まで歸る事もなるまい。危險だ。」
こゝでも議論が結著しない。
小早川隆景は速戰論者であつた。立花宗茂も同論であつた。宗茂は西大門に陣を取つてゐたが、「敵が近い。」といふ報告を得て、戰はうと、遂に前進を起した。時は、永祿二年正月二十六日の未明であつた。
その道を、わが自動車は、市山、魚袋の兩君、自分ら夫妻を乘せて疾駈しつゝある。
獨立門の傍を通る。人家がだん〳〵稀になつた。北漢山が嚴めしい顏をして見下してゐる原に出る。

逢ふ人の一人もあらず肅々と決死の群が行き
しこの道

水の渇いた川に出る。昌陵川であらう。車は河原の上を塵を立てゝ渡る。比較的樹木の多い小山に上る。道は迂曲してゐる。

「こゝが礪石嶺なんでせう。」

「もう三里來たんですね。礪石嶺まで三里といふのですから。」

宗茂の隊は、すでにこゝより手前の彌勒院の野で、明軍と最初の衝突をしてゐるのであつた。明軍はもとより多勢であつた。宗茂の前隊は苦戰した。もはや日出頃であつた。

「宗茂は川を前に當てゝゐたといふのですが、あの砂川だつたのでせうか。

あれでは、あまりたよりにもなりさうもありませんね。」

「明軍は隊伍が整つてゐて、砲までもあつたといふのですが、どんなものですか。前隊がすでに砲までも、引つ張つてゐたのでせうか。」

宗茂の骨折りは多大であつた。勝つには勝つたが、手負死人が多いので、睨みあひの體である。十一時ごろに、第一戰は終つたが、その次はどうなるか分らない。

草も木もそよぐ風なき今し見る動搖みわたり
しあとのしづけさ

宗茂と敵との衝突は、すぐ京城に聞えた。宗茂と申し合はせてゐた小早川隆景がすぐに繰り出す。宗茂の陣の傍を通つて、望客峴を過ぎて、高陽原の山下まで進んで行つた。

「もとの戰場よりも、隆景がずつと進んで行つたところを見ると、敵の前隊は、よほど退却したものと見えますね。」

「つまり立花方の働きがえらいので、本隊が、惠陰嶺の向ふに居るのを頼みとして、ずつと退却したのでせう。」

京城にゐた人々は、前隊に戰が始まつたといふので、陸續として繰り出して來る。道も、畑も、川も、はやり切つた人と馬とで、一ぱいになつたらしい。

「八萬餘人で『都までさゝへたり』といふのですから、人間の洪水のやうであつたでせう。」

「それが皆決死で、血眼になつてゐるのですから、勇ましいが、恐ろしかつた

でせう。」

車が山を下ると、兩側に嶮はしい山を殘して、平地の續いたのが見える。これが碧蹄の谷間である。

「どのくらゐの幅なのでせう。」

「『長さ一里、幅三四町より七八町』と案内記にありますね。」

「案外狹いものですな。これでは、明がいくら大軍でも、使ふことが出來なかつたでせう。」

「鋒先の鋭い日本軍が、それを部分的にやつつけたのでせう。」

道の双方は田と畑とである。

隆景の軍は、第二次の衝突をしようとした。大谷吉隆が來た。宗茂が勝つたのを好機會として、京城へ退却したら、と勸告したのであつた。しかし、隆景は聽かなかつた。「こゝを退却したら、敵は追躡して來る。すると、京城

に歸れぬ中に敗北するやうになる。こゝはどうしても進擊せねばならぬ」と云つた。

時は正午になつた。小早川の先手は戰を始めかけた。

「明軍が三十萬餘もあつたといふのは、どうでせうか。峠から下る時には、大山の茂つたやうだといふのは、あの向の峠でせうか。」

「あそこから、さう一遍に下れさうにもありませんね。」

「隆景が敵を見せない爲めに、後向に備へさせたといふのも、それから出た事なのでせう。まさか、さうとも思はれませんね。」

「しかし、日本では見られないほどの大勢であつたのは、ほんとうでせう。それには、さすがに驚いたでせう。」

隆景の先鋒は、敵の大勢に壓倒された。それにも拘らず隆景は進擊した。宗茂は左翼となり、毛利元康、小早川秀包等が右翼となつて進んだ。本隊と

左右翼とが、自づから包圍攻擊の形を取つた。

李如松も最前線に出て叱咤怒號した。その部下の精兵は、隊伍をよく整へて、密集してかゝつた。しかし兩方が田であり、しかも騎兵が多い。一たび淤泥の中へ陷つては出ることが出來ぬ。その上、短劍しかなく、銃も少なかつた。それに反して、我は歩兵が主で進退自在であり、長刀の鋭いのがあるので揮擊縱横である。加ふるに鳥銃も多く、一齊射擊も隊伍を崩すに十分であつた。押しかぶせて進む强力の前には、立つものもなかつた。一隊破れ、二隊潰える。

舉れるは塵か血汐か人と人馬と馬とがあひ搏
つところ

道は平坦で、車はよく走る。

「この邊の田に、敵の騎兵が陷つたのでせう。」

「討死といへば立派だが、たゞ敵からか、味方からか、押し落されたり、潰されたりして、大將も兵卒も、一緒になつて死んでしまうんだから、全くつまらないものだ、と大坂陣に書いたのがありますが、全くその通でせう。」

「それを、日本刀の長いので、どし〳〵大根を切るやうに切られては、やりきれませんね。大將の李如松も狙撃せられて、危かつたのですね。」

「『金甲の倭將が提督を搏つ。』といふのは、全く川中島ですな。それに、それが外國との戰ですから、一層美事なものですな。」

「正午から四時頃で、すつかり勝つたのはえらいですな。」

車は峠に近づいてとまつた。見ると、棟の反つた建物がある。三つに分れてゐるが、一續きの形になつてゐる。

それを目がけつゝ門を入る。碧蹄館といふ額がかゝつてゐる。

日は極めて熱い。草いきれが烈しい。蟬が盛んに啼く。遊んでゐた鮮童が、珍らしさうによつて來る。それを見て大人までも出て來る。

階を上つて見る。さほどの廣さはないが、堂々たるものである。床の上で晝寢してゐる人もある。自分らが近づくのを知つてゐるらしいが、起きようともしない。

「誰か呼んで來ませうか。」

「折角來たのですから、説明してもらひたいものですな。」

市山君が探しに行く。

村は寒村に過ぎない。こゝは街道から、少し左に寄つてゐる。街道に添う

て人家が稀にあつて、樹木も立つてゐる。支那の使節が開城の方面から京城に向つて來る。それを、朝鮮の官吏が敬しくここまで出迎へる。附庸國の悲しさは、鞠躬如として、人々は頭も擧げ得ない。使節は、その中を昂然として通る。館に上つて安座する。美酒が出る。佳肴が列ぶ。官妓が出る。歌が起る。舞が始まる。使節が顏を赤めながら國自慢をする。鮮廷を非議する。土地の荒蕪を笑ふ。待遇の不足を云ふ。朝鮮官吏はたゞ唯々として、一言の返しもし得ない。道で見た獨立門は、朝鮮が、支那のこの羈絆と、輕蔑とから、完全に獨立したのを表象したのである。思へば、これと、彼と、その間は實に長い距離を示してゐる。

永井君が、一人の紳士とともにやつて來た。

「この方が郵便所長。こゝの委しい方で、說明をしてやらうと云はれるのです。」

所長は極めて叮嚀である。自分らの質問に答へつゝ、

「礪石嶺も、望客峴も、話しとは違ひますね。」

「當時は、あの向の礪石嶺あたりも、よほど木が繁つてゐたものと見えます。宗茂の兵が衝突する前に、明軍は伏兵を置いて置いた、それを豫想して鐵砲を打ち込んだら、逃げ出したといふのですから。」

「午後の戰の時に、宗茂は左翼となつたといふのですが、かう狹いところでは、本軍が眞中の大道を進むと、傍から出られさうもないのですが。」

「畑とも、田とも云はず進んで行つたのでせう。」

「想像以上の激戰だつたのでせう。」

「ほんたうに激しかつたと思はれます。朝鮮兵と違つて、實戰の經驗をもつ連中と連中とですから。」

「追擊の混亂は、どうだつたでせう。」

「あの山の前に、朱砂坪といふところがあります。そこへ追ひ詰めて、散々にやつたものと見えます。」

「うまい名をつけたものですな。内地では、血何とかとしか云はないでせう。」

「名のつけ方は、實に上手ですな。この碧蹄などもその一つです。」

「こゝの建物は、さう古くはないでせう。」

「中と左とが三百五十年前、右はそれよりも後だといふ事です。」

「額だけは、古いものだといふのはほんとうですか。」

「さうです。御入用ならば磨らせて上げませう。」

道は悪いが、それを犯して後の山にのぼる。大きな樺がある。

「これが隆景が兜を掛けたといふのです。」

「つまり、こゝまで追擊をして來て、一休みした譯なんですな。」

ふりかへると、礪石嶺までがいよ〳〵明らかに見える。更に惠陰嶺までもはつきり見える。引き上げて行く明軍、一擧して京城を奪はうとした明軍、平壤、開城と成功つゞきで、日本軍が眼中になかつた明軍。それが隙を與へない追擊を受けつゝ、うめく負傷者と、首のない死者と、旗と、馬と、槍と、楯と、隙間なく委棄しつゝ、將も卒もどちや〳〵となつて退却して行く、その間に狙擊せられて殆ど危かつた大將李如松が、近侍に守られながら、乘換の馬に鞭を擧げて、人馬を踏藉しつゝ逃げて行く。

樺の傍はさすがに凉しい。滿面の汗を拭ひつゝ立つ。古英傑になつたやうな氣持も湧く。

「私どもも、帽子でもかけませうか。」

木のかげに襟をひらけばすがやかに血の香を
もたぬ風肌を撫づ

開城

小西行長が平壌に破れて、大退却をする。李如松の大軍が後を蹂むといふので、京城の諸將は勢力を京城に集中して、これに當らうと計畫した。小早川隆景にも、奉行等は京城までの退却を促した。隆景は、

「とても死ぬべき命だ。退却などは以ての外。」

と云つて聞き入れない。大谷吉隆が出向いて行つて、樣々に說いたので、隆景は遂に退却に決した。而して、碧蹄館で、追つて來た李如松を散々に擊破した。この隆景の居たのが、開城であつた。

日本外史を讀んで隆景の壯志を知つたのは、少年の頃であつた。その時、はじめて開城といふ名を知つた。その後東洋史を習つて、高麗の都がこの開城であつたのを知つた。

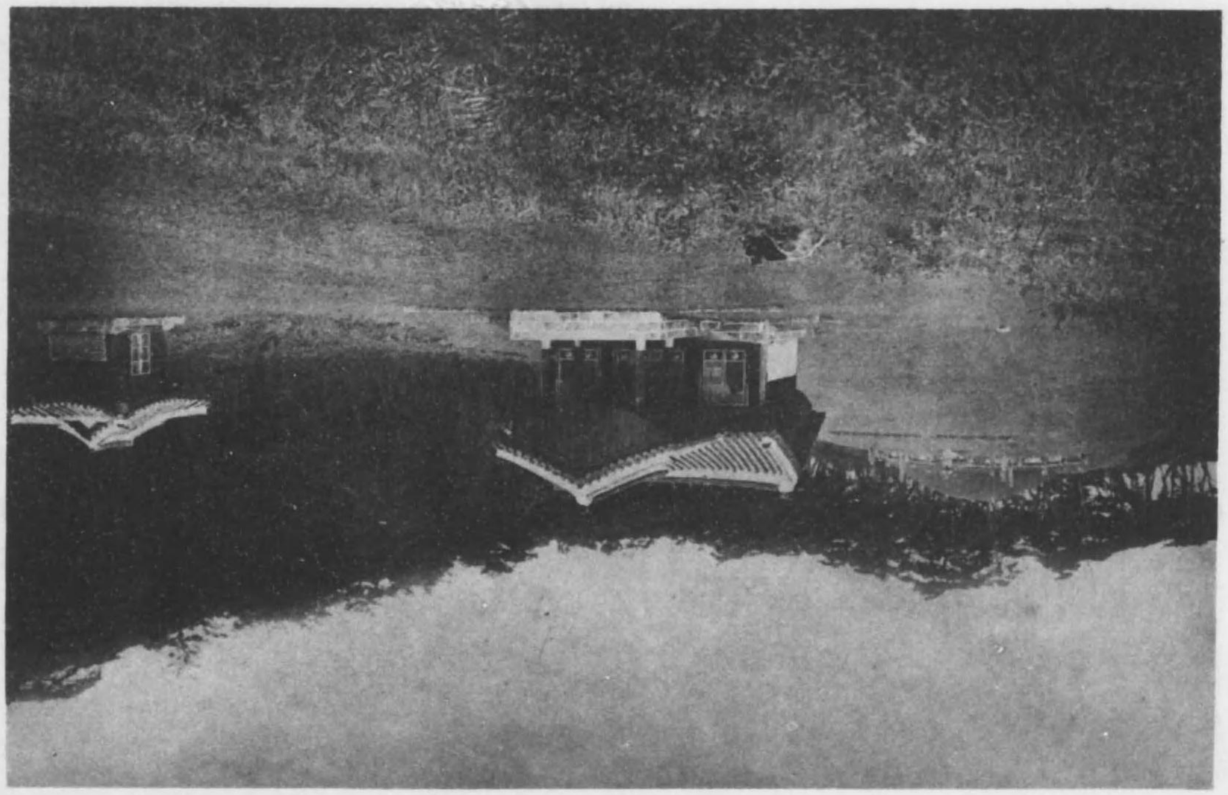
實に開城は高麗の都である。高麗の祖の王建が、弓裔から獨立してから、この開京を都城として後に傳へた。開京は乃ち開城である。高麗は大體半島を統一した大王國である。その都城としての開城は、歴史上重要な地位にある。

郡守の德江氏、郡屬の朱珍氏、殖産銀行支店長の尾崎氏等の出迎をうけた井上、市山、魚袋三君と自分らとを乘せて停車場を出て專賣局に廻り、南大門を通過した車は緩々と駛る。

「開城は古いところで、古風俗が殘つて居ます。女のかつぎを著てゐるのは彼處だけです。」

と云はれたので、注意して窓から見る。

町の道は狹い。兩側の家も、建の低いものゝみである。しかし、瓦葺の、檐の跳ね上つたのが見えて、壯重の感じがする。その間に、白いかつぎを被つ



刻

婚

た女が行き交ふ。今まで見たのと違つて、品位の點に於いて、よほど優つてゐる。

「珍らしいですな。顔を丸出しにして、子どもを落ちさうに背負つたのとは、大變の差があります。」

「しかし、さすがに暑いと見えて、殆んどすつかり、顔を出したのもありますよ。」

「京城のハイカラがゝつたよりも、奥ゆかしくつて、すべてがいゝですな。」

町を出はづれて、平坦な田畝道に出る。曲り曲りして行つて、路傍に留つたので車を下りる。

見ると、前は一面の芝山である。それを上つて行く。まづ石階がある。それを上ると、平地に一閣がある。これが祭をする處であるといふ。そこを過ぎて上りつゝ見下ろすと、所々に文武の石人が立つてゐる。上り極ま

るところに石床がある。その後に土饅頭があつて、芝草を被つてゐる。王陵である。

一拜して廻つて見る。欄干が繞つてゐる。陵の下部の面石に十二方位神が刻されてゐる。それの方位に相當してゐるのは、云ふまでもない。

「これが顯陵といふのです。太祖王建の陵です。」

「その當時のまゝなのですか。」

「いや、毎度改修せられたらしいのです。變亂が屢々あつたので、二度も三度も、梓宮を移したといふのですから。」

「李朝の影響もあるでせうな。」

「さういふ話です。國情が變つては仕方がありませんな。」

「太祖は薨去の時に、人が悲しむのを見て、『死なないものがあるものか。』と云つて笑つたといふのですから、あきらめのいゝ人であつたのでせう。」

「だから、陵が荒れても構はないといふ理窟はないでせう。」

芝の色は深綠である。兩方の松の林の間に、日の光がこぼれてゐるのも美しい。をり〳〵風が渡つて、さつと音がする。

「陵の位置がむづかしいのです。山が青龍、白虎、玄武、朱雀と整つて、繞らなければならず、また、主水が一つ、前になくてはならぬのです。」

「さういふ誂へ向のところは、中々ありますまい。」

「ですから、大探しに探すのですが、大抵さういふところに當つて、陵が作られたやうです。」

「子どもの時分に、平安奠都のところに、『四神相應の地』と書いてあるのを、先生が知らなくつて、困つてゐたことがありましたよ。」

「風水說は、支那、朝鮮のみでなく、その先生にまで、煩を及ぼしたのですな。」

陵の前に立つて見る。三方の山が近く、前面のは稍遠い。川が一筋前を

流れてゐる。理想的境地であつたであらう。それが毎度移轉せしめられたのみならず、國さへ臣下に亡ぼされてしまつたのは、何故であるか。

松を吹く風のなごりにうち靡き柔らかなりや
陵の草

石人と肩をならべてわが立ちぬいにしへ人と
なれるこゝちに

車がまた舊の路を駛る。一轉して石橋の此方に來てとまる。下りて歩

き出す。

「こゝが滿月臺といふのです。高麗の宮殿がこゝにあつたのですが、この通り廢墟になつて居ます。」

前方に突兀とした岩山が、高く峙つて居る。

「大層狹い傾斜地ではありませんか。宮殿はどういふ風に出來たのでせう。」

「この傾斜を幾段にも切り平げて、下から上へ、上へと、宮殿を作り上げたのです。」

「こゝも、例の四神の關係から出來たのです。後と兩横と、三方に山があり、遙か前面にもまた山があり、前にあんな具合に、主水が西から東へ、客水が北から流れて一所になつてをりませう。」

「うまい具合になつて居ますな。後の山は何といふのですか。」

「松岳山といつて居ます。」

「峻しい、がつしりした岩山ですな。あすこまで、宮殿が連なつて居ては、すつかり一幅の樓閣山水の圖ですな。」

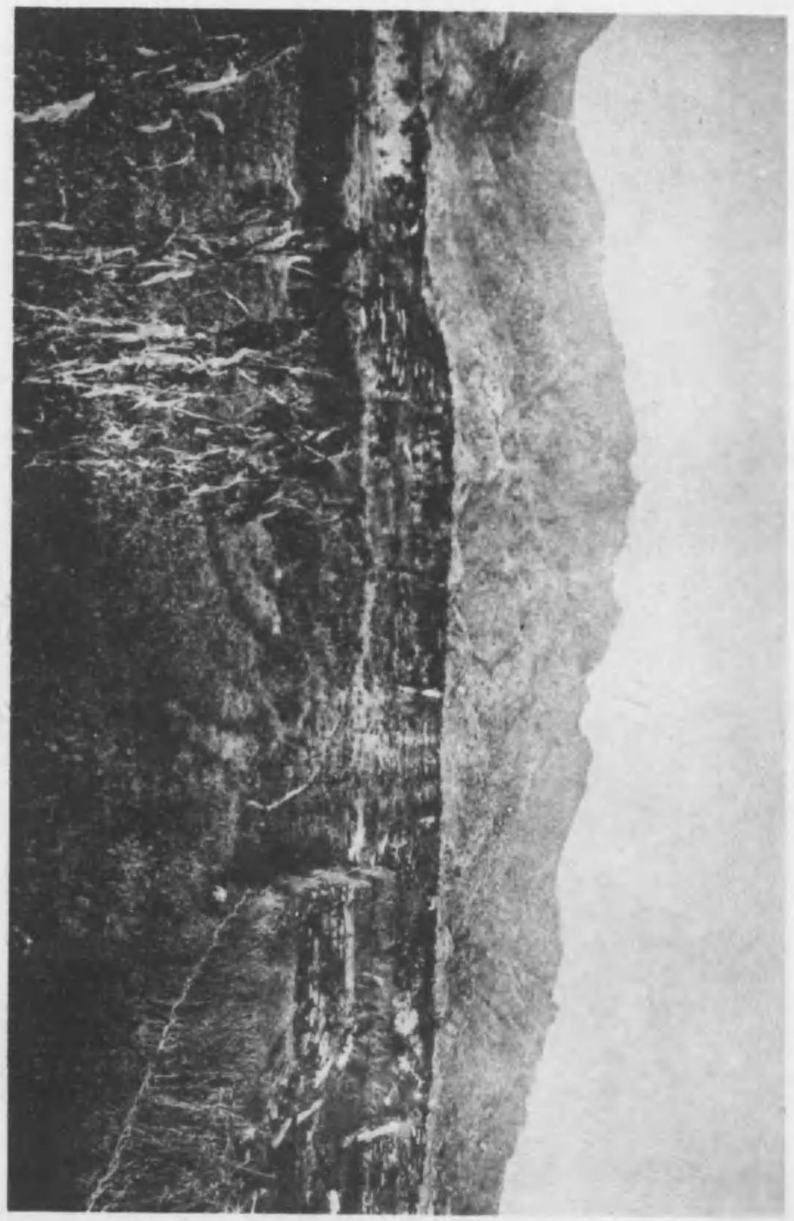
ぼつ〳〵と上り初める。門は昇平門といふさうであるが、その址はすでに過ぎた。神鳳門閶闔門の礎石が見える。それを通ると高臺になる。石階が四個處ある。が、雜草が被つて居る。會慶門がその上にあつたのである。それを這入ると、正殿の會慶殿の址がある。礎石で正面九間、側面三間であつたことが分る。

門から左右に廻廊が走つて、更に折れて山に向つて進み、而して王宮の外園となつて居たらしい。

こゝから、地勢がだん〳〵高くなる。長和殿、元德殿、萬齡殿、長齡殿等の諸殿が、或は後に、或は横に建て連ねられてゐて、山にまで續いてゐたと思はれ

る。飛簷や、丹檀や、彩甍や、曲欄や、或は高く啄み、或は長く横はり、或は鱗と連なり、或は霞と流れる。それが皆、松岳山の朝暉夕陰と映發した有樣は、云ひ得べからざる美觀であつたであらう。

ありし日の樣をうかぶと大殿の礎の上に目を
閉ぢて立つ
懷きつる玉の御殿も奪はれて寂しかるらむ山
の心は



鴨綠江

高麗の滅亡は、李朝の興隆の爲めである。その先祖の李成桂の勢威が滿朝を壓する時、敢然としてこれに反抗したのは鄭夢周であつた。成桂の黨はこれを要擊した。夢周は錄事金慶祚とともに命を致した。それで高麗は遂に滅亡した。夢周の要擊せられたところは、善竹橋である。

「橋へ急ぎませう。」

例の狹い街を車が走る。左に門が見える。右に橋が見える。下りてまづ橋に行く。橋は石造で二つになつてゐる。一方は柵があつて通れない。その一つが渡れる。渡ると碑が立つてゐる。夢周の後の好仁が立てたところで、橋を別に架して、もとの橋を通過せしめないやうにした理由を記して、「橋上有血痕、古老相傳爲異事。」など書いてある。金慶祚の碑もそこにある。讀み了つて顧ると、橋の上に薄赤い斑點がある。

鮮女が三四人白衣を洗つてゐる。水があれば乃ち洗濯をする。ちやぶ

ちやぶとやつてゐる。それを見つゝ橋にかゝると、向うの門から年の行つた内地人の女が出て來た。

「またこゝで洗ふのか。『外に行つてやれ。』と云つたではないか。」

といふ。水さへも清くしておかうと云ふのであらう。

新しき力の前に滅びゆく舊き心をいかにすべけむ

道を横切つて左の門の方へ行く。これが碑閣である。門を這入ると、荒草が離々としてゐる。

閣はしまつてゐる。急いで來て開けてくれたのは、鮮女を今叱つたその人であつた。

碑は中々立派なものである。李朝の英祖のと、李太王のと、二つがことに大きい。いづれも龜趺に乘つてゐるが、その龜が慶州の武烈王陵の前のと、形は似て、趣はすつかり異なつてゐる。李朝の藝術の價の多くないのは、それでも分る。しかし字句は、一つは「道德精忠亘萬古、泰山高節圃隱公。」とある。他のは「危忠大義光宇宙、吾道東方賴有公。」とあつて、なみ〳〵ならぬものである。

「反對者が、王者からこんなに云はれては、くすぐつたい感じがしないでせうか。」

「政治的の意味もあるんでせう。」

「李朝では、高麗の殘黨といふので、開城の人をひどく壓迫して、官職にもつ

かせなかつたと云ふではありませんか。」

「そのために商賣が發達して、富有な人が却つて多く出來たといふのです。」

「簿記法なども自然に出來て、特別なものがあるといひます。」

見廻つて出ようとする。

「碑の中で、いつも濕つてゐるのがあります。」

と女がいふ。

「案內記に『泣碑』と書いてあるのですか。」

「石の質に相違ないのですが、意味がありさうですな。」

と語りつゝ出る。

今度は車が岡に上る。子男山といふ。遂に停つたところで下る。一軒の亭がある。倒れた大樹がある。それをしきりに一人が切つてゐる。亭の前に立つた四五人がある。

「こゝが觀德亭といふ射亭です。」

「射亭といふのは。」

「弓を射るところ、つまり弓場です。これから弓が初まりますよ。」

「こゝでは、弓が昔から盛んで、射亭が方々にあります。」

人々は一列に並ぶ。弓は半弓である。順々に滿月のやうに引き絞る。半空に向つて切つて放つ。矢はうなりを立てゝ燕のやうに飛ぶ。それを目で趁うて行くと、谷一つ隔てた斷崖に向ひつゝ、遂に眼界から消えてしまう。しばらくして、斷崖の平地にかすかに砂煙が立つ。見ると、斷崖に、縱に長い楯のやうな的がある。亭からそこまで幾町あるか、一寸見當がつかない。

待つてゐた次の一人が、引き絞つて切つて放つ。矢は風のやうに飛ぶ。暫くして、崖の前に砂烟を揚げる。

次の一人が「今度は。」といふ勢で、力を込めて切つて放つ。矢は見る〳〵消えてしまう。とよほどして「ばたつ」といふ音がする。確に命中したのである。思はず、あつと聲を揚げる。

次の一人が「今度は自分も。」と云ふ色を、顏に表はして切つて放つ。矢は霞の中に消えて行く。暫くして「ばたつ」といふ音がする。覺えず喝采する。射手の顏にも微笑が浮ぶ。

次々に射る。次々に中る。「ばたつ」といふ音が絶えず響く。飽かず見て居る。射手は皆得意さうである。

語り次ぎ云ひ次げよとか射目人は弓弦の音を
高くひゞかす

日はまだ高い。射手は射續いで止めさうにもない。

平壤

ほの〳〵と綠高原うちけぶり朝の日出づる山
も見えざり

今まで續いてゐた山が遠くなつた。平原が深い綠をもつて、眼に迫まつて來る。平壤が近くなつたのであらう。

長い鐵橋を自分の乘つた汽車が渡る。川は大同江であらう。

川の向うに黑い一帶の丘陵が著しい。

「あれが牡丹臺でせうか。」

といふ間もなく停車場に著く。

道廳を出た自分らを乘せた自動車は、繁華な通を走り過ぎる。平壤第一の通ださうである。

幾轉折して丘陵の下で停る。道廳の遠矢氏、殖産銀行の菊池氏等に案內せられて登り初める。

「今入つたのが七星門です。文祿の時に、李如松が攻めたといふのです。」

道は嶮はしくはない。しかし暑いので、喘ぎ氣味となる。登りつめると、檜のそりかへつた亭が一つある。こゝが乙密臺であつて、亭は四虛亭といふのであるが、乙密臺といふ額が大きくかゝつてゐる。

亭に駐けよつて見おろすと、崖は隨分高い。大同江とその對岸が一目に見える。さすがに大江である。浩蕩として流れてゐる樣は、鐵橋の長さで

も測られる。ポプラの綠の濃い島が浮んでゐる。

「あれが半月島で、あれが綾羅島です。」

いづれも綺麗なものである。

臨み見る大江の風の涼しきに汗も拭はぬ顏吹かせつゝ

「日淸の時に、馬玉昆がこゝを死守したといふのです。」

「文祿に、明軍が松の枝に著物をかけて日本軍を脅したといふのも、此邊ですか。」

「あちらの松の所でゝもあるでせう。」
「日清の時には、背面攻撃が成功したのですが、丁度李如松が行長を攻めたと同様の經路を取つたのですな。」
「文祿に守り手でさん〳〵に敗れた日本軍が、明治に攻め手で、支那軍をどしどし打ち敗つたのは、妙な巡りあはせですね。」
臺を下つて左に松林の中に這入る。まばらにさす日影が快い。箕子廟が前に立つ。朱塗の柱の古びたのもいゝ。
「元山支隊が、こゝをひどく攻めつけたといふことです。こゝの主將は、左寶貴とおぼえてゐますが、意氣旺盛で、わざと恩賜の服を著て突出した、といふのです。」
「齋藤實盛が錦の直垂を著て討死したのと同樣で、壯烈ですな。」
「それと反對に、文祿の時には、こゝがまづ敗られてゐますね。」

「大砲澤山の瞞討では、さすがの小西も弱り切つたでせう。」
後かへりをして、あまり高くない樓門の後に出る。
「これが玄武門です。」
「原田重吉が、玄武門かと云ふところですな。」
門を潜つて表に出て見る。牡丹臺と乙密臺とが兩方から俯瞰してゐる。
「芝居ではえらい高い大きい門でしたが、これだけでは小さ過ぎますね。」
「あつちこつちから狙撃せられては、とても門を占領することは出來なかつたでせう。重吉はたしかにえらいですね。」
また坂を上りはじめる。道は割合に嶮はしく且つ長い。遂に登り詰める。こゝが牡丹臺である。亭によつて瞰下ろす。大同江の流は一層長く見える。今まで見えなかつた橋が見える。島が見える。霞んでゐるところは、古墳によつて名高い樂浪の邊であらう。對岸は一體の綠野である。

「あれが第六聯隊で、向うが製糖會社です。」

「では、船橋里もあちらなんでせう。」

「あの羊角島の對岸が丁度そこです。日清の記念碑も立つてゐます。」

あれを進んで來て正面から敵を牽制して、背面の攻擊を成功せしめようとした大島旅團の苦勞は思ひやられる。こゝから砲擊すれば、彼はたゞ立派な的となるよりしかたがないのである。

ふりかへると、背面軍が來た路筋が歷々とわかる。元山支隊と、朔寧支隊とが、砲煙を漂らせつゝ、今も來るやうな氣持がする。

また更に文祿にかへつて、小西が沈惟敬に欺かれてゐた練光亭も見える。牡丹臺を奪はれてから閉ぢ籠つて、明軍を殺傷した內城のあとも思はれる。目に餘る大軍でどうすることも出來ず、退軍に決した時、大石某が敵の的となりながら、退路を見究めたといふ大同門もわかる。そして濟つて逃れた

平壤大同江

大江はすぐ眼の下にある。

高きより見れば心のおどろかる目に入るもの
のあまり多きに

自分らと同じやうに欄に凭つた人がある。動かうともしない。眺め入つてゐるのである。

「何としてもいゝ眺望ですな。」

「實際このくらゐいゝところは見當りませんね。」

見てゐれば、自然に戰爭の事なんか忘れてしまひさうである。

殘りなく洲見え島見え橋見ゆる午後の大江の
水照のつよさ

名殘を惜しみつゝ下つて、お牧の茶屋の前に出る。更に下ると、また樓が一つある。浮碧樓といふ額がかゝつてゐる。

樓の内は今宴會半である。白衣疎髯の人が、安座して杯を擧げるのもある、歡語するのもある。妓生が長鼓を打つ。それに合はせて舞ふのもある。遂に妓生を擁して舞ひ初めたのがあると思ふと、殆んどみんな立ち上つた。同じやうな姿態をして舞ひ連れるのである。長鼓の音ものどかである。

舞ふ速度も悠やかである。白い衣と白い衣と相交はる。遙かに見ると、群鶴が一時に翼をかへすやうである。

のどかなる樂のひゞきに舞の手に夏の夕日の
落ちも急がぬ

一同はお牧の茶屋に上つた。夜を待つて、舟で川を下らうといふのである。鼓の音はまだ盛んに聞こえる。

大連

停車場の電燈の明るい下に、大勢の顔が見える。脇屋君の大きな丸い顔がことに目に立つ。奉天からの堀越君の細いのも見える。

「どうも暑いのに御苦勞樣です。」

「まことに有り難うございます。」

迎に來られた人々の中には、意外の顔も交つて居る。舊知の令孃の若い夫人となつたのが多い。

ふりはへて出で來ながらも物陰に半かくるゝ
人は誰ぞも

自動車が脇屋君の家に走り著く。ハイカラな玄關を入つて、古風な二階にあがる。突然來たので出迎にまごつついた事を、脇屋君がまづいふ。

妻の從妹のこゝの夫人は、自分も昔から知つてゐる。

此の國の油の煮物うまければ主人も妻も肥え
ましにけむ

あたり一面滿鐵の社宅と見えて、同じ形式の家が並んでゐる。

空はよく霽れて、星がきら〳〵と輝いてゐる。あの邊に黑いのが大和尙山でゞもあらうか、と當推量をする。

二十餘年間殆んど逢つた事がないので、話がはづむ。上陸以來親戚に逢つたのは、これが始てゞあるので、彼處の、此處の、何でもない物語が果しがない。西野君、土井君の夫人も交る。

たやすくも母となりけり水潛りよくすと昨日
誇りし少女

浴室が二階にあるのも妙である。

「どういふ譯ですか。旅館のやうですな。」

「この家は上は上、下は下と別々であつたので、――勿論露西亞人が居たのですが――それを一緒にしたので、こんな具合です。」

「設備が惡いと、下は大變ですな。」

「それが中々よく出來てをります。」

一睡して起きると、窓から見る空は眞青だ。赤煉瓦の整つた社宅が幾列も見える。趣は乏しいが、きちんとして居る。それと、空との對照は、いかにも殖民地といふ感じを惹き起さしめる。脇屋君は港にも出てゐる。

「埠頭の景況を御覽なさい。中々盛んなものですぜ。」

「大埠頭だといふ事は聞いてをりますが、横濱とはどうですか。」

「横濱よりも盛んだといふ人もあります。」

それに向つて車を走らせる。大通は茜だ立派で、日本化した町の名が、一

一附いてゐる。

埠頭には、大きな汽船が今出ようとしてゐる。三階の露臺に昇つて見る。様々の色をしたテープが、何百筋ともなく、陸から舟へつながつて居る。

別れゆく心の如く紙の紐ちぎれむとして猶たゆたへる

乘客は甲板に集つて居る。朝の光は甚だ暑い。が、離情を減ずることは出來ない。風がをりをり吹く。テープが盛んに波立つ。何をいつても通じないので、みんな默つてテープを持つて居る。たゞ日蓮宗の講社と見え

る一群が、どん〳〵と團扇太鼓をたゝく。

見かへると、昨夜迎へた夫人の一人が立つてゐる。

「昨夜は有難う。御見送りですか。」

「親類が歸るので來たのです。すぐ同じ人に逢ふ位狹いところです。」

「それだけ親密でせう。」

などゝ云つて居る中に、船が動き出す。テープが一度に切れる。帽子を揚げる人、ハンケチを振る人、一齊にどよめき渡る。白い波頭も見えるが、それはここだけで、外洋の波は穩からしい。港を出る頃まで見おくる。

出ではてゝ波にまぎれし舟の腹白く見えたり

方向變ふらしも

「老虎灘に行つて見ませう。こゝでの遊び場ですから。星が浦の方には、外の人が御案内するさうですから。」

と脇屋夫人がいふ。

「老虎灘とはいゝ名ですな。どうしてさう云ふのですか。」

「海岸の岩に虎のやうなのがあるからでせう。」

廣い道を車が飛ぶやうに走る。すぐ郊外に出る。新しい赤煉瓦の家が多い。銘々の意匠で異なつた形を見せてゐる。丁度、東京郊外の情態そのまゝである。

「西野さんの家があれですよ。」

「尖端的ですな。」

「中々氣が利いて出來てゐませう。」

西野君は、親戚の一人の若い夫人とゝもに、こゝに居るのである。

海岸に近く車が停る。下りて少し行くと、灣の岸に出る。日は中々暑い。茶店によつて休みつゝ見渡す。

灣はあまり廣くはない。左に突角がある。そのさきが大きな岩である。右にも突角がある。そのさきもまた大きな岩である。

「どれが虎の形なのでせう。」

「さあどれですか。あつちでせう。」

「こつちではないですか。この方が丁度口をあけてゐるやうではありませんか。」

といひ合ふが、人に聞いてみようともしない。

水は綠深く湛へてゐる。波は殆んど無いが、風の具合で處々白い。

「向うの岩のところへ、家内中で行きますよ。舟をあすこへ著けてもらつて、主人などは岩のかげが涼しいので、蓆を布いてころがります。」

「こんな日に行つて居たら、嘗いゝでせう。しかし岩が赭みを帶びてゐて、懐しみが乏しいですね。」

「どうも、内地の江の島のやうな古みのある岩は、すくないやうですね。」

風が涼しく吹いて來る。「しとろん」の杯の泡が飛ばされる。

日のさゝぬ巖(いはほ)のかげに舟よせて眠れる人か白き衣見ゆ

崖を下りて、波打端まで行つて見る。

こまやかに波のしぶきを吹く風にまづこそ濡るれ淺靴の尖

小崗子

「油斷をすると、何でも盗まれますよ。下駄の片方でも、持つて行かれるんですもの。」

「それでは、昨夜の盗難などはあたりまへですね。」

「ほんとに油斷も隙もありませんわ。」

妻が、昨夜支那服を誂へに支那人の店に行つて、それの勘定してゐる間に、傍に置いた靴を盗まれてしまつた。この店は中々大きなので、店員も大勢ゐて注意もいゝのであるのに拘はらず、盗まれてしまつた。向うでは大いに謝つた。弁償をしてくれたのは、店の信用に拘はると思つたからであらう。その點は大いに賞讃していゝのであるが、盗んだのは、客の支那人であつたらしい。

「取られたものは屆けても、中々出ませんが、小崗子へ行けば、すぐ賣られてゐるといふのですから、其處へ行つて買つた方が、早く片附くと敎へられるのですよ。」

「そこへ行つて見ませうか。泥棒市場と云ふのだと聞いてをりました。」

車を其處へ走らせる。道は中々長い。しかし廣い立派なものである。よほど走つて停る、左側を、運轉手の案内に從うて這入る。

「こゝは肅親王の持地で、地代を取つてゐるんださうです。」

「隨分廣いのですか。」

「御覽になると分りますが、區劃がちやんとしてゐて、立派で、しかも廣い街です。」

入口に活動寫眞館がある。「那陀驢海」といふ幕がかゝつて、支那樂をやかましく響かしてゐる。西遊記風のものをやるのであらう。

「こゝからが金物店です。」

なるほど金物屋が續いてゐる。新しいのもあるが、古い錆びた釘まで賣つてゐる。

「こゝが食傷新道とでも、云ひませうか。」

油が湧きたつ鍋の中に、何か入れて煮るのもあり、燃えさかる火の上に、何か串にさして燒いて居るのもある。その中に、巨大な體格をした支那人が半裸で出て來て何かいふ。花和尙だの、九紋龍だのが再現したやうである。

暑き日の檐を傳ひて流れ來る油の煙避けもあへなく

「こゝが古著通です。」

古著がずらりと並んでゐる。東京の柳原の樣子である。洋服が頗る多い。店番が道まで出て來て何かいふ。中には男の外套を妻に示して、

「やすくして置く。買うよろしい。」

などゝからかふのもある。廻り廻つて中央に出る。そこは藝者町である。柱によつたり、格子にかけたり、窓にもたれたりして居るのは、藝者なのである。通り抜けてふりかへると門柱があつて、それに花を尋ね柳を折る何人たるを問はず、といふ意味が書いてある。

「古物通です。」

古物が山積せられてゐる。日本の婦人雜誌、講談雜誌まで、繩でしばられて土間に置かれてある。日中で客がないので、小僧が横になつて本を讀ん

でゐる。御伽話位なものであらうが、勿論漢文の無點本である。

「こゝで、ある人がラツケツトを買はうといふと、十五錢といふのです。『一本では半分だ。兩手に持つのだから二つ入る。』といつて、二つを十五錢で買つたさうです。しかしその後、外の人が行くと、向うも知つてゐて、今度は二つは賣らなかつたさうです。」

「それも贓品ではないでせうか。」

「何とも云はれませんな。」

「しかし、ほんとの支那趣味はこゝにありますな。」

「北京には、大きいのがあるさうです。」

「北京にも行きたいのですが、駄目ださうですね。」

「戰爭の影響で、汽車が通じませんからね。」

日が傾いて來る。彼の花と柳との天下となるのに、間がないであらう。

旅順まで

旅順と云へば乃木大將を思ひ出す。

學習院に、挨拶に行つたことがあつた。大將は、

「御苦勞樣です。」

と叮嚀に云はれた。世評に聞いて、嚴格な人ばかりと思つてゐたところが、意外ににこやかなので、一寸驚かされた。

耳を煩つて赤十字社病院にゐられた。そこへ見舞に行つた。大將は寢臺の上に座つて、

「御叮嚀に。」

と挨拶せられた。靜子夫人をはじめて見た。傍から、

「どうも有難うございます。宅も閑なもんですから、學生方の作文を讀ん

でをります。面白い事を御書きになるものですから、笑つてをります。」
などといはれて、極めて愛想がいゝ。
御馳走になつた事がある。自分のすぐ傍は、主人の大將であつた。
「八重葎といふのは、何ですか。」
「蔓草の一種と聞いてをります。實物はまだ見た事がありません。」
「八重葎の實といふものを貰つたが、どうですか。」
など云はれた。
寫眞に自署して頒たれた。修整しないものであるから、大將の面目はよく現はれてゐる。自分は今も秘藏してゐる。
遂に大將の通夜に出ねばならぬ日に逢つた。
時間は短くなかつた。宵から朝まで無言で、交代はあつたが棺前に座つてゐた。學習院での事、病院での事、御馳走の夜の事を繰り返し思つた。

これらの事をまた繰り返しつゝ、大連から旅順までの自動車に今乘つてゐる。
道は平坦である。飛ぶ以上に車は走る。長汀曲浦が敏速に轉廻して目まぐるしい。
「あまり速力を出すので、恐ろしいと思ひました。御氣を御つけなさい。」
東京を出る前に注意せられたのであつた。その速力の中に自分は今居る。しかし、別に恐ろしいとも考へない。窓の外の景色の變化に注意はしつゝ、大將の事を猶思つてゐる。
「歌を御詠みですか。私もをり〳〵やるが、私のは出たらめだから。」
といはれたのも思はれる。
麻の紋付の帷を著て、寢臺の上に座つて居られた姿も思はれる。
髭が隨分伸びて居たのも忘れられない。

見るまゝに消えゆく中に留まりて確かなりけり君が面わは

東鶏冠山

用事を濟ませた自分らを乘せて、車は街を離れて山に向ふ。遂に坂をすこし上つたところで停る。

今日は旅順通の堀越君が案内者である。

「こゝが東鶏冠山北堡壘です。」

堡壘といふものを見たことのない自分は、好奇心に滿ちて駈け寄つて立つ。山頂に大きな窪みがある。その中央の高いところに砲があつたのである。その周圍に壕がある。その周圍に數多の窓、乃ち銃眼をもつぺトンの壁がある。それが日本軍の方からは、すつかり隱されてゐる。

下りて壕に入つて見る。思つたよりも深い。壁に添うて行く。入口があるので這入る。中は立派に起居の出來る廣さである。露兵はこゝに居

て、壕に飛び込んで來る日本兵を射擊したのである。向うにばかり氣を取られて、突擊して來た日本兵を、背面から選み擊にすることは、まことに容易なのである。

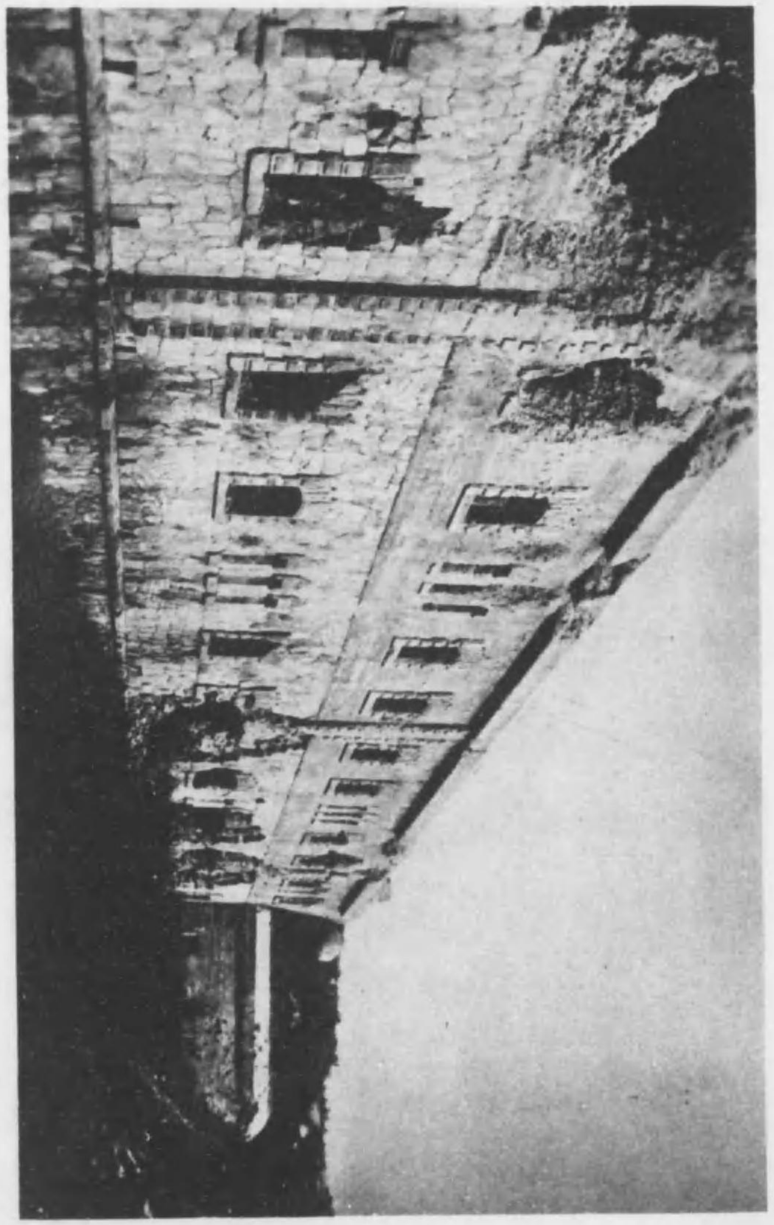
「こんな具合に出來てゐたのですかね。」

「こゝに大小三十餘門の砲があつて、十分に射擊したのですから、たまつたものではありません。それにこゝに達するまでには、電氣を通じた鐵條網が張つてあつたのですから、まづそれに引つかゝつたのです。勿論、それは破るには破つたのですけれど。」

自分らは今露兵の位置に居る。外壕の上に出て、麓を見下ろす。あまり高い山ではない。しかし展望はよほど利く。

「どういふ風に、日本軍はやつたのでせう。」

「八月廿一日の總攻擊の時には、四國の四十四聯隊が來たのですが、この傾



石壁の間に日出を見る

斜を一氣に上つて、猶進んだのは外岸の頂上まで上つて、日章旗を立てたといふのです。」

「さうすると、この邊まで來たのでせう。勇敢なものですな。」

「しかし、飛び込んだのは、皆この下で屍體となつたのですから、悲慘ではありませんか。」

目に見える氣持がする。

かへり來よ火に煽られて灰のごとベトンの前
に散りし魂

正攻法を取つて坑道を鑿つたが、容易でない。敵からも掘つて來る。遂に爆發せられたが、却つて穹窖の一角が現はれた。

盛んな攻防戰で、穹窖内の一部を占領した。戰が一層激しくなる。

「敵と顏を突き合はして、話も出來たといふのですから、恐ろしいですな。」

「麵麭と、酒と交換したなどといふのは、人情味のある話ですね。」

「十二日になつて大爆破をやつたのですが、あまり强大で日本軍の埋沒したのもあつたのです。」

「寫眞で、煙の上つてゐるのを見た事があります。すつかり火山の爆發のやうだつたんですな。」

「戰爭ほど悲慘なものはありませんね。すつかり止めたいものですが、仕方がない事でせうか。」

「生き續く限は、どうもならないでせう。」

人の子の穢しからむや神だにも矢とり太刀と
りなほあるものを

二百三高地

山の下に車が停る。道は迂曲しつゝ、自分らを上に導く。山は草で被はれてゐる。何の見るべきものもない。

日は頗る暑い。汗は盛んに流れる。勇氣を出して一曲一折してゐる中に頂上に出た。二つに分れてゐる。その一にまづ辿りつく。

二百三高地である。

旅順攻圍中最も多大の犧牲を拂つて、占領したところであるのは云ふまでもない。

はじめには、何の設備もなかつたさうである。中途から防備を初めて、後には、力を注いだものだといふが、今見ると、何等の遺蹟ももたない草山に過ぎない。第二回攻擊の時には一時占領したのであつたが、抛棄してしまつ

たさうである。

しかし旅順を陷落せしめる必要上、速やかに占領すべきであるので、殆んど全力をこゝに擧げた。明治三十七年の十一月廿七日から九日間攻擊しつゞけて、十二月五日に遂に確實に占領した。

「こゝを奪ひ取り、奪ひ返されした時の有樣は、どうでしたらう。」

「三千人あまりも死に、六千人あまりも負傷したといふのだから、激しさが、想像せられますな。」

「日本軍もえらいですが、露兵もえらいですな。改葬したのが、六千人あまりもあつたといひますからね。」

「そんな烈しくつて長い戰爭は、何處にもないでせう。」

火を投げて力と力あひうちぬ今しわが立つこ
の土のため

押し上げる、押しおろす、狂びあひ、雪崩れあふ。炎と炎と、人と人と、叫と叫
とまじりあひ、競ひあふ。これが晝も夜もつゞく。

崩れおち渦卷きのぼり湧きかへり亂れたちけ
むその人らはも

乃木大將の筆になる爾靈山の記念碑の前に立つ。いつしか上つて來た
人があつて近づく。
「乃木大將の御子さんのなくなられたのは、あの邊です。」
と下を指して敎へてくれる。

二人子のゆくへも問はずにこやかにましぬと
ぞいふあはれ將軍

「こゝの山も綺麗になりました。このやうに小松が繁つたものですから。」
小松の綠が濃やかに、近い山と谷とを被つてゐる。

「こゝには、まだ鐵のかけらや、骨がいくつもあります。一寸掘ればすぐ出て來ます。」

地面から、直ちに小さい鐵片を拾ひ出して見せる。

青やかに連れる山こゝにして消えし百千の命
おもへや

港が大方見える。外洋もよく晴れてゐる。

東港は狹い。西港は廣い。

「あの狹い處に、敵の軍艦が隱れてゐたのです。」

と指して敎へる。

「こゝを占領して、山の後から、あれを射つたのです。そこに觀測所を作つたものです。結果が皆分つたのですから溜りません。敵の軍艦は八日には忽ちなくなつてしまつたのです。」

といふ。この人は寫眞師ださうである。來る人々に熱心に敎へてくれるのだといふ。

閉塞船の沈沒したところは、地圖の示すによつて指點せられる。港口はまことに狹い。あれを塞いでしまへば、軍艦の出入は出來なくなる。出來ないまでも邪魔になる。この決行は巧妙であるが、敵も敵による。成功は期し難い。それをも遂行した。

「あそこに集まつて來るのを、近いところから探海燈で照らしたら、殘らず見えたでせう。それを射つたら命中したでせう。」

「目のくらむほどの光や、砲火の中を、どし〳〵進んだのは、何といふ勇敢な事でせう。」

聲立てず健夫や乘りし生と死と光と闇とまじる波間を

思ひ出すのは、また片岡大將である。

「日本海々戰の時は割合に樂でしたが、旅順の八月の海戰の折は、砲火が集中したので、一番危險でした。殿であつたから、自然に敵の目標になつたのでしたから。」

大將の話は、あの沖合での事であらう。大將の溫容は、その時にも變らなかつたであらう。あゝその人も、乃木大將とともに今はない。

おともなく青き油を流すかな夕ぐれ近き黃海の潮

雨の奉天

奉天の大攻撃は、自分の徴兵檢査を受ける年にあつた。戰爭直後、兵士が不足したといふので、大いに徴發せられるであらうといふ噂が盛んであつた。教授會の席上で、校長の高嶺先生が、

「尾上君、君は今度徴兵檢査を受けるさうですね。」

「受けます。」

「志願兵ですか。」

「いゝえ、あたりまへの兵隊です。」

「あたりまへの兵隊」はよほど變である。自分でもさう思つたが、人もさうであつた、いや自分の感じ以上であつたと見えて、どつと一齊に笑つた。自分も思はず笑つてしまつた。

近視眼と體格の不良なのとで、遂に自分は「あたりまへの兵隊」に出ずにしまつた。それから春風秋雨二十有餘年の後の今、地圖の上のみで知つた其處へ、自分が來たのである。

張作霖が敗れて、北京から退却する。瀋陽驛近くて、爆發のために死亡する。一事件が必ず起るであらう、といふ噂が頻りにあつた。

「滿洲の日本軍は、奉天に集つてゐるさうですな。」

「さうでなくては、居留民が危險になるほどの事が爆發するのでせう。」

などと人々がいふ。

「そんなところへ行かなくても、いゝぢやありませんか。」

「もすこし待つて、平和になつてからにしたら、どうですか。」

自分らを止めてくれた人もあつた。

「大連に行けば、大抵樣子が分るでせう。それで進退を極める事にしませ

う。」

といつて來た。新義州まで出迎に來られた堀越君に聞くと、

「大丈夫です。何もありません。」

と明確な答である。

「では、ともかくも大連に行つて、旅順も見て、それから行くことにしませう。」

といつた。その停車場に今下り立つたのである。

堀越君や安達君等の出迎を受けて、瀋陽館に到著して見ると、なるほど形勢はまだ平靜ではないやうである。廊下で行き逢ふのは、軀幹長大のしつかりした人たちである。軍服は著てゐないが、將官佐官の連中といふことはすぐ分つた。

「支那人かと思つたら、日本人か。」

支那服を著てゐる妻を見ていふほど、支那人は目を著けられてゐるらし

い。惡いところに來たといふ感じもするが、また異なつた情趣を味はれると思ふと、樂しい氣持も起る。

話はすぐ、それに移る。

「實際、何か起りさうでしたよ。」

「どちらがどうかしようとしたのですか。」

「ところが、支那側で極めて穩和であつたので、たうとう事は生じませんでした。」

「張作霖の事件には、みんな驚いたでせう。」

「行つて御覽になればすぐ分りますが、京奉線と滿鐵線と交叉してゐて、奉天に今一歩のところで、突然事件が起つたのですからな。」

奉天大會戰も、自分らの若さの失ひとともに昔になつて、說かれるところは現在の事件である。

「日本軍隊は何處にゐるのですか。」
「小學校を本營としてゐるのです。町の入口には、鐵條網の用意せられたのもあります。」
見たいものだと好奇心が先立つ。
雨はしと〳〵と降つてゐる。玄關に出ると番頭が、
「よく降ります。こんな事はなかつたのですか。」
といふ。
「この頃はこんなになりました。」
「梅雨のやうですな。」
「町には、傘屋も殆んどなかつたのですが、この頃は出來ました。旅館でも、雨傘の用意をしなければならないやうになりました。」

大通を車が走る。浪速通といふのださうである。堂々たるものである。廣場が見える。大會戰記念碑が六十尺あるさうであるが、屹然として立つてゐる。
いはゆる滿鐵附屬地を外れるところに、今聞いた鐵條網が、横町に引き込んであるのが目に附く。しつかりした木を長く組合せて、それに繩ひつけてある。自分らが、よく垣根などに見るのとはすつかり異つて、遙かに丈夫なものである。
「あれを使つた事があつたのですか。」
「事がなかつたので使はなかつたのです。横町に入れ込んだまゝになつてゐるのです。」
「事がなくつて何よりでしたね。」
車は盛んに走つて、いはゆる城内をさして進む。向うに支那風の大きな

門が見え出す。

「あれが大西門ですか。」

「よく御存じですな。」

「地圖で今見たばかりです。」

門の左右はいふまでもなく城壁である。灰色であるのは陰鬱の感じもするが、却つて重厚の味もある。街の道は廣くない。泥を擧げて車が行き違ふ。大きな鼠色の建物が見える。

「あれに張作霖が居たのです。」

「今は張學良がゐるのですか。」

「さうです。支那風のものゝ中に、西洋風のがあるのは妙に見えませう。」

「ちつと調和がよくないやうですな。」

支那の巡査や兵士が、所々に立つてゐる。皆若々しく、溫和らしい容貌の

持主である。中には、十幾歳で敦盛を今様にしたやうなのも見える。

奉天は清の發祥の地であるから、すべてが大規模であらうと思うて見ると、街衢は意外にせゝこましい。東西南北の四門を通して、大街が十字形に出來てゐるといふのであるが、その大街がこれである。宮殿の前を通ると、例の兵士が立ち、東三省憲兵司令部の札がかゝつてゐる。堂々たる宮門が併んで居るが、直ちに道路に接してゐて、奥床しさはない。しかし雨に濡れて光る古典的色彩は、燦としてあたりを照らしてゐる。

塵のごと雨のかゝれば黄のいらか朱の檀のあ
さらかに見ゆ

車の停つた處が滿鐵公所である。支那服の立派な、日本語を巧みに話す人が出て來て應待する。よく上手に遣へるものだと思うて、名刺を交換すると、それは眞の日本人であつた。

中庭の上にある大きな額、それは張作霖その人の書である。

「この建築は、珍らしく立派ですなあ。」

「瓦や色彩も、北陵のやうにしたのださうです。」

瓦の青色などは、よほどの工夫で出來たものであるといふ。貴賓室も、應接室も、食堂も、支那式に出來て燦爛としてゐる。露臺に出て見るが、雨が甚しいので外を望むことが出來ない。

「四庫全書を見たいのですが。」

「それはすでに通知しておきました。すぐ入らつしやい。」

車を轉じて宮殿に乘りつける。傍の教育會といふ門標のあるところを這入る。

文溯閣といふのが、此處の名である。老儒らしい人が導いてくれる。經部が二十架で九百六十函、史部が三十三架で一千五百八十四函、子部が二十二架で一千五百八十四函、集部は二十八架で二千十六函、その全體が百三架と六千百四十四函で、三萬六十冊が閣の階上階下に秘藏せられてゐるといふ。一度は袁世凱が北京に移したのださうであるが、張作霖がまた持ち歸つた。この御蔭で、自分らもこれに接し得るのである。

四庫全書といふ名は耳に熟してゐる。その原本、清朝全盛の力で謄寫せられたのは、どんなものであらうかと思つて居たのを、こゝで初めて見得たのである。

何といふ立派さであらう。秩序よく積み上げ、順次正して陳列せられた

書架、書筐、連亙して盡きるところのない一大城壁を望む感じがする。しかも隙間のない配置、整頓は、上手な造城家が、時間をかけて作り上げたかとも疑はれる。

老儒のやうな人を始め、その他の人々がよく案内してくれる。ことにその一人の如きは、極めてにこやかに、頼むがまゝに、どの筐でも明けてくれる。喜びつゝ見て行くと、その謄寫の文字の立派さ、正確さ、一點の走筆もなく、略盡もない。もとより誤字もないであらう。脫字もあらうとは思はれぬ。確實と、謹嚴とが、全體を支配してゐる。

階下と、階上と、右に巡り左に巡つて、彼れを抽き、是れを披いて飽くことを知らない。雨のために、何處も薄暗いのであるが、記載が明らかなので、迷ふところはない。端から端まで目が屆く。

ふと陶九成の書史會要が目に著く。日本の書を褒めてあるところ、「二王

之迹而中土能書者亦鮮能及紙墨光精」を開けて、案内の人に示すと、莞爾として笑ふ。國自慢をするのを、可笑しがつたのであらう。自分も引き入れられて笑ふ。

國といふ隔はあらじ人と人書を中にて笑みあへる時

出て來ると、人々は叮嚀に送つて出てくれ、その一部は更に宮殿の一部に案内してくれる。

「こゝは、觀劇せられたといふところです。」

「かう吹き通しでは冬は寒いでせう。」
「いや、觀覽席は全部溫突だといふことです。」
なるほど眞中に舞臺がある。上つて見る。西洋風の透視畫法が新奇で興味を惹いたと見えて、處々に使つてある。こゝの劇を、溫突に溫まつた席から見たら面白いであらう。
そこから出ると、人々は別れる。

ゆくりなく再び逢はむ日ありとも知らでや過
ぎむ面忘れして

車を大東門に走らせる。書肆に入つて、何かと渉り巡る。上海あたりの石印本が多い。大抵東京で一度見たものゝやうである。少しばかり買ふ。二つ三つ珍らしいものを聞いて見るが「無い。」といふ。
小東門から四平街に這入る。奉天の銀座通ださうである。雨のためか、あまり繁昌してゐない。吉順絲房といふのに車をつける。
日本人相手は大事と見えて、日本向のものもあります、といふやうなことが書いてある。土產物を少し買つて、五階上の露臺に出る。雨が大方止んで、風がかなり强く吹く。それを凌ぎつゝ眼を放つ。
最も近く大きく峙つてゐるのは宮殿である。張學良の大帥府も其處と指される。滿鐵公所もそれと見られる。それらの間に、樣々の人家、種々の店舗が、混然雜然として軒を交へ、屋を並べてゐるが、その中を、大道が縱橫に通じてゐる。それら全體を廻つて、灰色の內城壁が大體正方形に連なつて

居る。更にその外を、一帶の大外城壁が、蜿蜒として取り捲いてゐる。

「あれが、高さが三丈以上もあるのですか。」

「そんなにも見えませんが、さうなのです。」

「あの具合では、上で砲車が樂に曳かれますね。」

「壯大なものでせう。」

「あの白塔の形もいゝですよ。」

「向うの喇嘛塔も面白いでせう。」

と云ひあふ。

大城壁の向うには、商埠地や、滿鐵附屬地の人家の櫛比したのが見える。が、それらを越して、殆んど些かの岡も見えない。たゞかすかに青黑いものがある。

「あれが、北陵ですか。」

「さうです。午後はあちらへ行つて見ませう。」

「この雨では道がどうでせう。」

城壁外は、茫々たる高粱の畑である。その間を通ずる滿洲一流の道は、どんなになつてゐるであらうか。

しかしそれよりも、この壯大さはどうであらう。黃粱の畑といふよりも原、否海と云ふべきであらう。この原の海は四方に廣がつて、黃色の極めて緩い波をもつてゐるが、遠くなるほど、蔓つた空の關係から、黑みを帶びて果といふものがない。たゞ天が、自分らの頭の上から、四方に極めて緩い角度をもつて次第に傾き、遂に傾き切つてゐるので、辛うじて、その限界が作られてゐる。そしてその作つた劃線は、おのづから大きな圓をなしてゐる。海で、水平線が圓くなつて自分らを圍んでゐるのを、今度舟から見た。陸で、地平線がかくの如く水平線と違はないのを、こゝで始めて見る。天は大きな

圓い伏籠となつて、圓い地上に自分らを伏せてゐるのである。自分らは鳥であらうか。飛ぶことを知らぬ。蟲であらうか。辛うじて歩くこと、這ふことが出來る。が、それも、天と地との大に比しては、何にも當らない。今は昔、野を逃げた露西亞軍、逐ひかけた日本軍、その大勢も、たゞ蟻の群の右往左往に過ぎなかつたであらう。

天地のひろき心に向ひつゝ小さなる子のいふ
ところなき

まじろかず向ひてはあれど天地の廣きに心堪
へられなくに

ひろきこの天と地との中にしてなど人の子の
小く生れし

天地の大きさ見よとことさらに神は引きけむ
こゝにわれらを

北陵

がたり〳〵と車が動き初める。

自動車では、道が悪くて行かれないといふので、堀越君が馬車を雇つたのである。車は狭い、腰掛も小さい。ペンキの剝げかゝた鎧戸の板も落ちかかつてゐる。窮屈に座つてゐると、雨あとの凸凹道に、御者が鞭を上げたのである。

兩側の店は大體小さくて、しかも汚ない。某々飯店といふのが、やゝ大きく目につく。

「飯店といふと、一膳飯屋といふ位なのですか。」

「さうでもありません。堂々とした店で、さう書いてあるのもあります。」

「なるほど水滸傳にも出てゐますな。古くからさういふと見えますな。」

「『兩角の酒を持ち來れ。』といふやうな、豪傑らしい人も見えません。」

「朱貴のやうな主人も居ないでせう。」

街はづれに出ると、大きな寺らしいところがあつて、鼠色の土塀が連なつてゐる。それに傍うて赤土の泥道を車が行く。反對の側には、濁つた水が廣く湛へてゐる。

「妙なところに、池があるのですな。」

「池ではありません。たゞの水溜です。」

「それが道中にあるのは、どういふのですか。」

「排水といふ事を考へないものですから、溜つたら乾き切るまで、水はなくなりません。」

「少し低いところに、一寸道をつけたらよさゝうなものです。傍に川もあるではありませんか。」

「それが支那的なところです。道は公衆の通るところで、自分一人のものではありませんから、それに骨を折るのはつまらんことです。それよりは丈夫な車をつくつて、その上を故障なく通る方が、利口だといふのです。」

「それでは、道は一層毀れるではありませんか。」

「毀れたつて、崩れたつて、自分一人のものではありませんから、どうでもいいのです。」

「徹底した利己主義ですな。」

家がだん〳〵疎らになる。四圍皆平坦で、高粱の畑が續いて見える。此方から一條の鐵路が走つて行く。彼方からまた一條、斜に走つて來る。遂にそれが交叉する。

「あれが滿鐵線、これが京奉線です。あの交叉點で爆發があつて、張作霖が殺されたのです。」

「あんなところですか。すつかり見透されて、隱れところもないではありませんか。何をしようたつて出來さうもありませんね。」

「それが出來たのですから、不思議がられてゐるのです、」

「驛のすぐ近くでやられては、遺憾に堪へなかつたでせう。」

「遺憾と思ふ間があつたか、なかつたか、多分なかつたのでせう。」

「骨牌なども落ちてゐたさうですな。その時まで弄んでゐたのでせう。」

「全く不意だつたのです。」

今の世はみ空の星も落ちて來ずおもひもかけぬ人を死なしむ

家はすつかりなくなつて、道は高粱畑の中になる。畑と畑との境がないのであるから、植ゑ物のないところは、人も車も、何處を行つても差支ないやうである。赤土の泥は道一ぱいで、乾いたところは更にない。車の痕が深く掘れて、いはゆる鮒も住みさうである。

橋にかゝつて、がつたん〳〵と行く。前方に珍らしく森が見え出す。何處も茶褐色の中で、ふとこの緑を見る。沙漠でオアシスに逢つたのにも似るであらうか。嬉しいといふよりも、頼もしいといふ感じが起る。

森がだん〳〵近くなる。遂に車はその中に這入つて行く。あまり大きな樹はない。が、緑は濃い。道の傍には芝草が青々としてゐる。

入るに従つて、樹の丈が高くなる。緑はますます濃くなる。いよ〳〵北陵へ著いたのだ。

門が現はれる。番兵が立つて居るのが見える。その近くまで行つて、車は停る。危なつかしい戸を開けて下りる。

奉天大洋の相場が下落してゐる。出がけに受取つた紙幣を出して、堀越君が入場券を買ふ。十圓紙幣何枚かが、それに當るのである。一寸聞けば驚かれるが、日本の金では小額である。

牌樓を仰ぐ。前山門といふのを通る。そこから煉瓦塀が初まつて、左右に連なつてゐる。

眞中の磚道の上を靜かに歩んで行く。兩側に馬、駱駝、象、獅子、豹等の石の彫刻が、規則正しく并んでゐる。その後の松は木ぶりが面白い。それぞれ重たいほどよく繁つて、ゆつたりと枝を垂れてゐる。

『汝の荊棘中にあるを見む。』と銅駝に向つて云つた話が、こゝにも當りさうですな。」

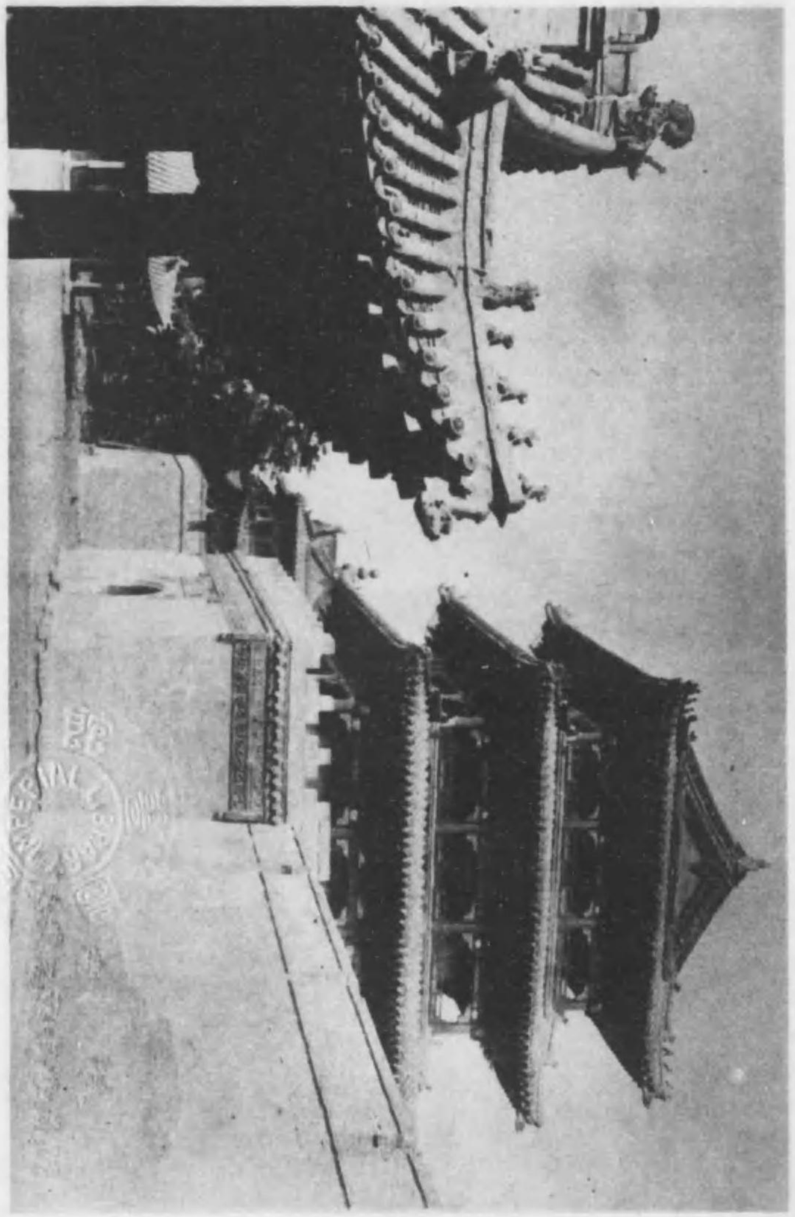
「掃除が比較的いゝので、荊棘中とまでは行きませんね。」

「それにしても、寂しいものですな。」

「あの馬は、太宗の乘つた馬の寫生だといふのです。」

「あれに乘つて、山海關から出ようとして、出られなかつたのですね。」

李自成の叛亂と、吳三桂の求援とは、愛親覺羅氏に取つて意外の幸であつた。これあるがために、山海關が開けて中原進出が容易く出來た。太宗はそれを遂げずしてなくなつたのである。北京の奠都も知らず、未曾有の大版圖の成就も知らず、民國への革命も、もとより知らず。こゝの舊都の一隅に、永久に眠つてゐるのである。この陵の築造に從事した後の帝王も、廷臣も、その以下の何千人も皆世を捐て去つて、その後の激しい變化を、少しも知らないのである。



北陵

知る幸も多かりぬべし知らずしてあらるゝ幸
も少なからむや

後を見ると、牌樓と前山門、向を望むと、牌閣と隆恩門、隆恩殿。鱗と連なる甍の黄と、壁の朱と、刻意に塗り分け、精細に盛り上げた丹と、青と、更にそれらが或は二層、或は三層と、重なり合ひ、疊まりあつて、綠の中から湧出した如き有樣は、見ぬ世の阿房宮か、繪の上の月宮殿か。

しかし、離るべきものは離れ、横たはるべきものは横たはつて、雜草と葛蔓とがその間を綴つてゐる。

碑閣に寄つて見る。大きな碑が中にある。康熙帝の撰で、漢滿蒙三語で

書いた太宗神功の文が刻してある。

碑閣の後の隆恩門の五彩は、ことに燦然として目を射る。その横から、前後の觀を恣にすべく、煉瓦塀に上つてみる。門の左右には、この塀が連なり、共に兩隅の各一角樓にまで到つて、直角に一折し、また他の兩隅の各一角樓にまで達し、その各角樓から、眞中の明樓に及んで終る。その塀の包圍の眞中にあるのが、隆恩殿である。

塀の上は、大道のやうな廣さを持つてゐる。しかも平坦であるから、前後を顧望しつゝ歩む。

左手の宮殿は、寶城といふ名のあるほど、爛然たるものである。隆恩殿は四方に一づゝの角樓を持ち、前に三層の樓門を持ち、また高峭な煉瓦塀で包まれてゐるのであるから、一層の威嚴を保つて、帝王の如く雄視してゐる。

角樓から角樓までの右側は、驚くべきほどの深林である。數知れぬ老樹

が、重い枝と、濃い葉とを持つて、伸び得るだけ伸び、狂ふだけ狂つてゐる。俯瞰すると、大波が風もないのに、澎湃として湧き立つやうである。ことに、その下草も、また繁り得る極度に茂つてゐる。恰も岩礁に生えた海藻が、潮のまに〳〵うねりうねるかとも見える。林に乏しい滿洲で、かゝる木草の海を見るのは、まことに珍らしい。

「乃木軍の一聯隊が、早くこゝまで進んで來て、露軍に包圍されたといふのは、どの邊でせう。」

「さあどの邊か、はつきりしませんが。」

「この邊でせうか。こゝに這入つては、どこから何が來るか分りこはないでせうから。」

「聯隊の這入つたのは、午前五時といふのですから、林の中は眞暗だつたでせう。敵も、どの位日本軍が來たか分らなかつたでせう。」

「激しい戰爭だつたさうですな。」
「聯隊が殆んど全滅しかけたといふのですからね。」
「眞暗の時に大におどかされたが、明るくなつて見ると、割合に少人數だつたので、悔しまぎれに盛んに敵は攻擊したのでせう。」
「ほんとに、この森では、守るのにも、進むのにもこまり切つた事でせう。」
「この邊の人は呑氣なもので、聞いても殆んど何も知りませんよ。」

今日はまた明日の昔ぞこゝにしてかく思ふだにむなしかるべし

角樓を過ぎて明樓に來ると、まさに陵の眞正面に出た譯である。ふくらかな土饅頭といふよりも、居然たる一大丘は、まさに太宗の陵である。これあるがために、前の諸門もあり、諸樓もあるのである。しかも、偉大さはあるが、前の壯麗と比して、何といふ哀れさ、さびしさであらう。茅、葛、萱等の野草が、刈る人のないまゝに數を盡して生ひ重なり、伸びかぶさつてゐるのは、寢陵といふよりも、草丘といふべきである。

新しき國の礎おくごとくこの陵は築き立てにけむ

浸み透る草の露にも醒めであれ今も安らに寢
らむ帝は

陵の上とも知らず伸び伸びてほしいまゝなり
野葡萄の蔓

つゞくらむ帝の夢をおほひつゝひろごりたり
や葛の大葉は

ハルビンの夜(一)

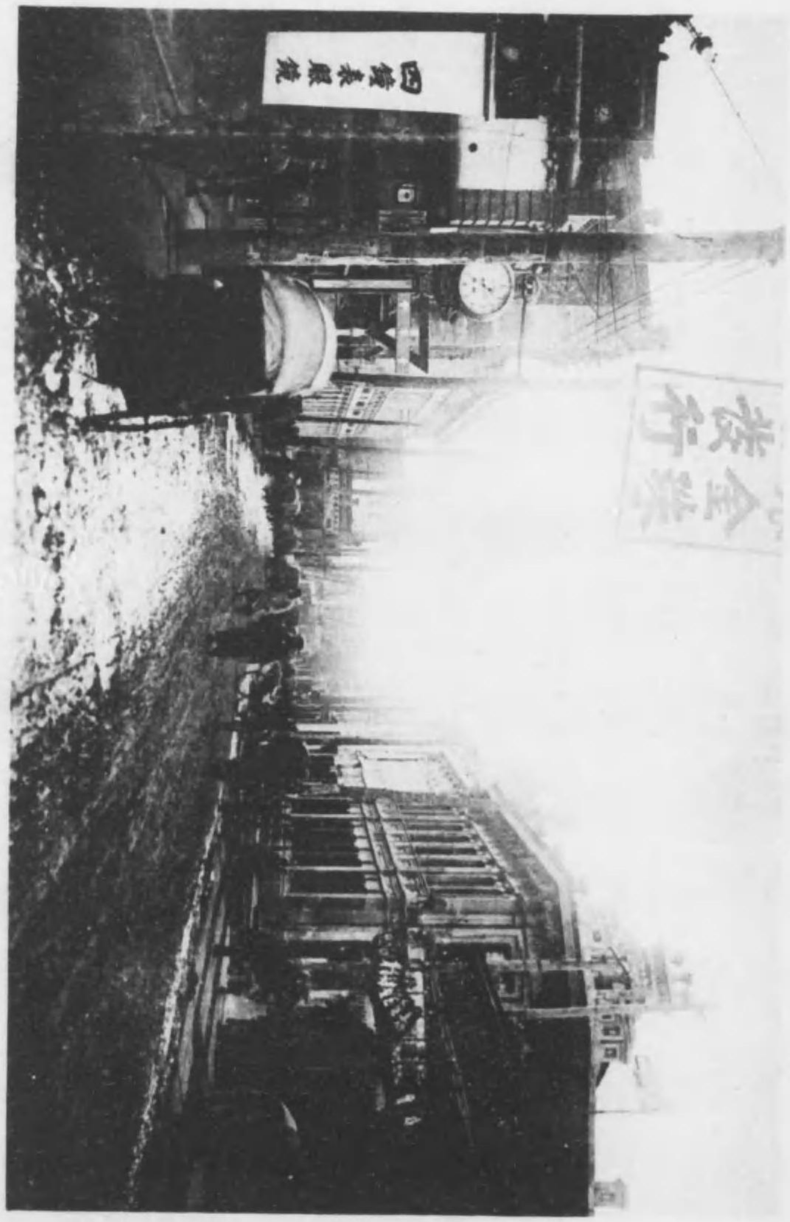
圖らず腦貧血を起した一夜は、却つて安易であつた。

十時頃ふと目まひがして、吐氣がひどく起つた。寢臺に上つて、枕を除けて仰臥して見た。吐氣が止まないので、下りて吐きに行くと、堪へられないほど苦しい。何時もやる事だから、その中によくなるだらうと思つて見たが、何だか不安心にもなつて來たので、醫師を喚んで貰ふことにした。ホテルの人が、

「日本人にしませうか、露西亞人にしませうか。」

長春からの列車の中で、支那人、露西亞人のみで、勝手が分らず、すでに少し困つてゐたので、

「勿論、日本人がよろしい。」



ハルビン支那街

といふと、

「此處に長く開業してゐる人がありますから、それにしませう。」

電話をかけてくれる。これで氣丈夫になつて待つて居ると、だん〳〵よくなる。もう醫者の來て戸を叩く時には、殆んど平素の氣分になつてゐて、應答もてきはき出來る。

「あなたの病氣は、とても直りませんよ。」

御醫者さんらしくない事を云ふ。

「どうしてですか。」

「病氣は、いくらよくなつても、元通りには決してならないのですから。」

「それには相違ありますまいが、直らんとこまりますな。」

「御歸りになつて、よく見て御貰ひなさい。」

「しかし、とても直らなければ、しかたがないでせう。」

「さうですが、差支ないだけにはしなければなりますまい。」
「あなたはこゝに長く御出ですか。」
「隨分長くなります。初めは露西亞人ばかり見てゐたのですが、この頃は外の人に讓つて、日本人ばかり見てゐます。」
「露西亞人の方も面白くはありませんか。」
「さうです。新聞に廣告さへすれば、直ぐ來るんですからなあ。」
「そんなに新聞を信用するのですか。」
「そりやあ信用してゐます。新聞は確かなものと思うて居るのですから。」
「ちやうど、私どもの子供の時と同じですなあ。私の近邊の人が、自分の家の事が新聞に出た。名譽のやうな氣持で見ると、大間違に間違つてゐたので、非常に怒つて『新聞は嘘を書かんと思つたら書くものだ。』と近所近邊『新聞を取るな。』『新聞を見るな。』と觸れ廻つた事がありましたよ。」

「この邊はさほどでもありませんが、まあ大體、その位なところです。」
「その人の中に、過激派連中や、帝政時代の人が大勢ゐるでせう。」
「こゝではそんな事をあまり云ひません。帝政時代のあはれな樣子をした人は隨分ゐますが。」
御醫者さん暇だと見えて、これからその話に移る。表には東崗子から續いた雨がまだ降つてゐる。白い寢臺の上に氣樂に寢てゐて、悠長な話を聞いてゐると、病氣などといふ事も、また外國にゐるといふことも思はない。病氣も中々惡くないものである。これがなければ、一日滯在で、南に歸る筈であつたのである。
帝政時代の人々は、御醫者さんの話の通に、極めて慘めな有樣であるらしい。このホテルに著いた時、玄關の大戸をさつと明けた堂々たる體格の露西亞人も、すでにそれらしかつた。出ると、前の道角に客待をして居る自動

車の運轉手の、立派な髯を持つてゐるのも、それに違ひないやうだつた。更に雨のそぼ〳〵と降つて居る道中に立つて、濡れそぼちながら、何か露語でいひながら、物乞をしてゐた老婦人も、それに關係あるものゝ氣持がした。この老婦人はことにあはれであつた。自分らが五人整つて、雨傘を傾けつつ行くと、すぐ横から出て來て、何かしきりにいふ。横山君が墓口から、すこし出して與へると、今度は自分に來た。分らないのでだまつて居ると、妻に來る、魚袋君に來る。皆分らないので、知らん顏をして居る。轉じて池田君に來る。露語の先生の池田君はすこし遣る。貰ふと直ぐに、水たまりの光る道を横切つて、ちひさな屋臺店に行く。そこにある西瓜の切を値切つて買はうとする。中々負けてくれさうもない。遂に斷念したらしく、また道を横切つて暗の中に去つた。
「此處のは、あんな風にやるから、うるさくてたまりません。」

「内地のは、一人が遣れば、大抵他の人には來ませんのに。」
あゝしなければ貰ひが少ないから、止むを得ないのであらう。
「境遇が變れば、すぐそれに適應して屈托しないのが、露人の特質ださうです。」
「あきらめがいゝのですな。昔の夢をいつまでも見てゐるやうなのは、駄目ですかな。」
「文學では、あきらめの惡いのを、いゝやうに云つてゐますね。」
「紅葉の多情多恨の柳之助のやうなのが、特に材料に選ばれるのですからね。」
「四谷怪談のお岩のやうなのは、露西亞にはありますまいね。」
議論は別として、實にあきらめのいゝ事は、褒めるに足ると思ふ。ホテルモデルンに食事をした。給仕人が數人來た中で、野津大將そつくりといふ

やうな氣高い容貌をしたのが、特に一人目立つてゐた。
「あれは、帝政時代の少將とか、中將とかいふのです。」
なるほどさうかと思つて見ると、更にそんな氣ぶりもなく、皿を片附けたり、持つて來たり、ナイフや、ホークを直したり、卓子を綺麗にしたりするのが、極めてかひ〴〵しい。――悲憤慷慨的の顏をしたとて、何にもならないことは勿論であるが――さつさとやり、つつ〳〵としまひ、他の給仕人よりも一層手際である。
「不統一な軍隊を始末するよりも、樂かも知れませんね。」
「それにしても、氣の毒な次第ですな。軍隊でも、自分はたゞ大體の指揮ばかりしてゐたのでせうに。」
帝政時代のぴか〳〵した劔や、勳章や、由緒のありさうな器具や、いろ〳〵のものが昔を語り顏に、ある店には澤山陳列せられてゐた。これらも逃げ

て來た連中が寶食ひにした品々である。猶その人々は、いづれも無籍もの
であるといふ。
「革命といふものは、結果の恐ろしいものですな。」
「過激思想をもつ人の心持はわかりませんね。」
「こんな有樣をあまり考へないからでせう。」
御醫者さんの話と、自分の考と相混交して行く。「いさことも戯業なせそ
天地の堅めし國ぞ大和しまねは。」の古歌の心が、つく〴〵思はれる。

御統(みすまる)の五百(いほ)つ白玉いさゝかの瑕なき國に瑕つくなゆめ

雨は降りつゞいてゐる。折々風が立つので、窓を打つ響がある。階下の
ダンスホールのピアノの音が微かに聞える。だん〳〵眠たくなつて來た。
十二時は過ぎてゐる。

ハルビンの夜(二)

ハルビンのダンスホールといふ名はよく聞いてゐる。しかし、どんなものだか、想像したこともない。自分らと全然別世界の事のやうに考へてゐたからである。

氣分はよほどよくなつた。が、まだすつかり起きるまでには到らない。寢臺に上り切りにして、半眠半醒の狀態でゐたところが、午後になつては非常に元氣が出て、自づから起き出さねばならぬやうにさへなつた。

しかし用心して、極めて簡單な晩餐を取つてゐると、例の横山、池田の兩君が見えた。

こゝの町では、營業は午前は七時から十二時まで、午後は三時から七時まで、といふ規定である。中にはそれに反して、夜も九時頃までするところも

あるといふ。しかし大體右の通であるから、買物は夕食後散歩の序などといふ譯には行かない。

「電話をかけて、『今夜行くから、特に開けておいてくれ。』と云つて置きましたから。」

寶石類でも土産にしよう、と頼んで置いたからである。

「雨も小止みのやうですから、御伴しませう。」

見ると、もはや降つて居る。が、通る人の、傘をさして居るのは殆んどない。大抵濡れながらである。それが例の肥幹長大な人たちであるから、一層目立つのであるが、その人々は一向平氣で、大手を振つて歩いてゐる。

「あゝいふ具合ですから、毛織物は都合のいゝものです。すこし濡れたつて、何でもありませんから。」

「傘の用意はないのでせうか。」

「女は持つてをりますが、男はまあないといふ有樣です。大通りのベンチで、隨分降つて居るのに、傘なしで話し込んで居るのを見ることもありますが。」

「內地でも、さういふ風になると便利ですな。しかし、いくら毛織物だつて、梅雨といふ氣の長い雨に逢つては、仕方がありますまい。」

「梅雨期のある土地は、まづこまりものですな。」

「滿洲に著くと、すぐ黃色な埃の中を歩くといふ積で來たのでしたが。こんなに降ることもあるのですか。」

「今年は特別です。だん〳〵氣候も日本化しますかね。」

傘をさして歩行くのは、極りの惡いやうであるが、なしでは、とても自分らは歩けない。道は意外によくない。敷石は石の破片を敷き詰めたのであつて、アスハルトの平滑のとは譯が違ふ。處々水溜もある。

「道路改修の事はいはれて居るのですが、費用の出所がないさうです。」

と露西亞最厲の後藤君がいふ。

「御覽なさい。あの服の著こなしのいゝこと。日本人は洋服の著方を知りませんね。」

と續けていふ。實にその通である。自分らのを、外人が見たら嗤をかしい事であらう。しかしまたこれを反對に、「日本人は日本服の著こなしが上手です。外人は著方を知りませんな。變な形ばかりして、得意になつて寫眞なんか撮つてゐるではありませんか。」とも云へる譯である。その國の服を、その國の人が著て似合ふのが當然である。他の國のを、更に他の國の人が著て似合はないのも、また當然であらねばならぬ、と理窟はいひ得るものの、前後して歩く時、同じ服を著たら、似合ふ方が外觀が確かによろしい。洋服の著こなしも研究すべきである。

キタイスカヤ通に出る。こゝが銀座通とも云ふべきところ、純然たる散歩道路である。兩側の大厦はいづれも店舗である。チューリンといふ雜貨店が大きく、幅を利かしてゐる。その反對の側に、松浦といふのが、狹いが高く欹つてゐる。ホテルモデルンも立派に見える。

九月初であるが、飾窓には毛皮の暖かさうな、氣持のよささうなのが、すでに頭を并べてゐる。冬服と見える意氣な柄の旣製品が、型にかゝつて立つて居る。それに非常に安い札がついてゐる。あれもこれも、買つて歸りたい。

雨がすこし止んで來た。鋪石の上を、足音輕く肩を并べて、ずつ〳〵と通つて行く人が一群、また一群、二群、また三群、四群、五群、六群と、見る〳〵殖えて行く。飾窓に目を配つてゐる自分らを、さつ〳〵と追ひ越してしまう。さまざまの服裝は、いづれも輕快の二字で被はれてゐる。男は髯の濃い、色の

白いのが目立ち、女は頰を紅く染め、目の傍を薄黑く塗つたのが多い。これらが續き、また續くのである。

「露西亞人は、散歩の時にはこんなに極まつて大勢出て來ます。日本人は遊び方を知らないんです。」

と後藤君が云ふ。なるほどさうでもあらう。がしかし、老人や子どもを連れたのは、一人も見えない。大抵夫婦か、夫婦らしい一組である。日本の家族制度とは全然相容れないと思はれる。それに、かやうにして急ぐところはバーか、ダンスホールか、あまりいゝところを指すのみではあるまい。

ハルビン洋行といふ語がある。ハルビンまで行けば、西洋へ行つたも同樣であるといふ。實にこゝでは、日本人の影は殆んど見えない。支那人もまた靴磨や、果物賣位の外はあまり見かけない。たゞ横行し濶歩するのは、露西亞人ばかりである。歐洲に行けば、これに各種の人物が交つてゐるの